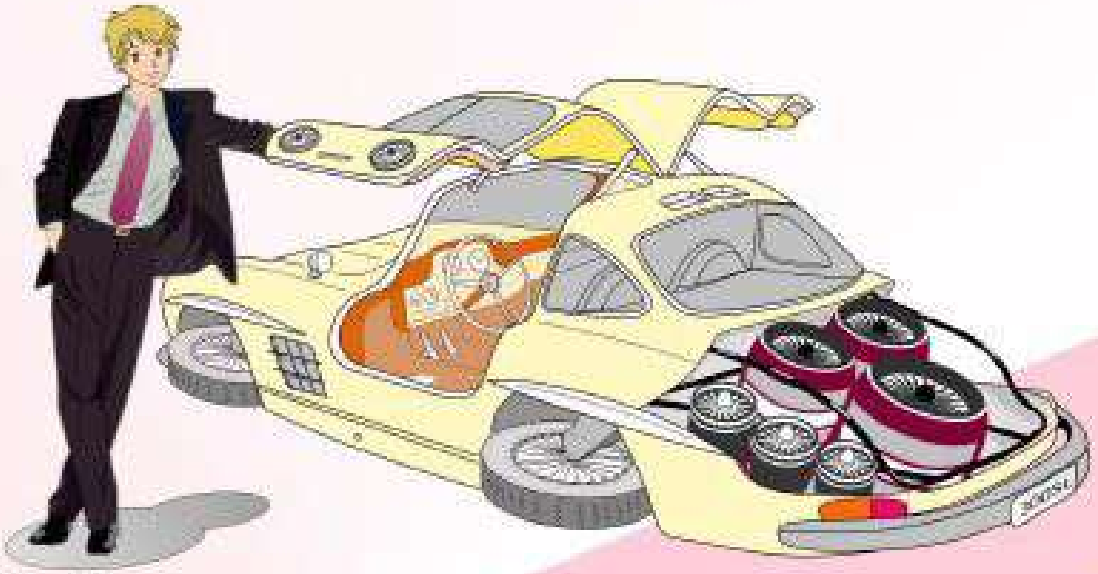
TAB COP2

TAB COP2



TAB COP2

TAB COP2

ＴＡＢ　ＣＯＰ-1

かたい純一

（人物一覧表）　　TABCOP-1

雪家一馬(20)…東京数理大学二年生

中島政弘(20)…同大学二年生
生田裕子(21)…同大学三年生・双子の姉
生田正信(21)…同大学三年生・双子の弟
森　和弘(40)…同大学・構造理工学部の准教授
江口浩喜(45)…警視庁捜査一課課長代理・江口班班長
松藤邦博(48)…同課主任・江口班
島田　隆(29)…同課刑事・江口班
桜木久美子(23)…同課新米刑事・江口班
江崎和彦(27)…メカオタクのフリーター
雪家智子(45)…一馬の母
鮎川昭二(38)…旧車會リーダー
馬場政行(50)…消防局・集中指令室室長

立花(29) …島田の同期・警視庁捜査一課・立花班班長
副署長(56)…所轄警察署・副署長
店主(51) …木下バイク店店主
美香(49) …店主の妹・喫茶店「ジョイフル坂田」経営
進藤(55) …ヤクザの男
暴走族団員Ａ(20)
　　同　　Ｂ(19)

（あらすじ）

ＴＡＢ　ＣＯＰ-1

東京数理大学の学生雪家一馬と中島政弘が、ある夜コンビニの前でドローンに襲われる暴走族を目撃した。小さなロケット弾・煙幕弾などを装備している。だが、ドローン操縦者は近くに居ない。

その後、ドローンが関係する事件が次々と起こる中、警察と並行してドローンの正体を追う二人。社会の為になる正義のドローンと、その逆の悪のドローンが存在した。事件のタイプが二種類あることで困惑する捜査陣。

そして五件目の事件で犯人としてドローン操縦者江崎が逮捕されるが、ドローン事件は続く。

その後、藤宮山で幼女が行方不明となる事件が発生する。そこに現れ幼女の居場所を捜索隊に知らせようとするドローン。そのドローンの帰還場所をバイクで追跡する二人。見失ってしまうが、その移動距離が長いことから一般のドローン操縦方法ではないことに気づき、その謎解きに奮闘する。

一方、警察の地道な捜査の末、同大学准教授の森が捜査線上に浮かび、それを知ることとなった二人。森の心を開かせ、これ以上の犯行を阻止しようとするが、頑なに心を開かない森。そこでドローンにはドローンで対抗することに決め、生田財閥の援助も得て対ドローン用ドローン（中島ドローン）を完成させる（網ネットを発射できるネットデール他の秘密兵器が組み込まれている）。

そして街中にまた、暴走族を襲撃する森ドローンが現れる。その現場へ、一馬自室のパソコンから操縦できるように改造した中島ドローンを向かわせ二機のドローンバトルへと発展。同時刻、現場近くのマンションで火災が発生する。バトルの後、森ドローンを説得する一馬（二機のドローン同士のマイクスピーカーによって会話する）。

説得の末、二機のドローンに網ネットを渡したタンデム状態で、火災現場に急行できないハシゴ車に代わってマンション 11 階の母子（生後間もない赤ちゃん）の救助に向かう。

（あらすじ終わり）

○　コンビニ・駐車場（夜）

買い物を済ませた雪家一馬（20）と中島政弘（20）が出てくる。一馬、小走りで前の通りに出て、その先を見ている。

一馬「ちょっと見てみろよ！」

中島、一馬の横に駆け寄る。

中島「さっきの族……何？」

先ほどコンビニから発進した小暴走族の一団が道路の途中で止まっている。二輪三台と四輪一台。一馬、少し上空を見て指をさす。

中島「ん!?　……ドローン……」

一馬「ドローンだよ。なんかいっぱい付いてるけどドローンだよ」

ドローンは小暴走族の行く手を阻むように浮いている。アクセルを小刻みに吹かせて威嚇する中、ドローンから真っ赤な閃光が放たれ、先頭バイクの団員Ａ（20）に命中、バイクから投げ出される。

★（図-１参照）

団員Ｂ「誰や――出てこい！」

と威勢のいい声を出し、辺りを見回す団員Ｂ（19）。すかさず連発の閃光が放たれ、あたふたする団員達。どうにか起き上がった団員Ａが無言のままバイクを起こし、その場を走り去る。ほかの団員も続く。辺りにエンジンの排気臭と火薬の臭いが広がる。野次馬は十人以上になっている。

一馬「……人間を黙らせちゃったね……あのドローン！」

中島「確かに、すげぇ……」

顔を見合う二人。ドローンは族たちを追いかけず、その場にホバリングのまま、カードらしきものを何枚か吐き出した後、上空へ飛び去る。パトカーのサイレンが近づく中、その中の一枚を一馬がポケットにしまう。駐車場端の街灯の下でそのカードを取り出し見入る二人。

中島「俺にもよく見せてよ」

一馬「ああ……」

中島「タブ、コップ、おれ、しん、けい……」

カードの片面に『ＴＡＢ　ＣＯＰ　俺真警』と書かれている。

中島「裏は……」

一馬「夏の夜に　鳴いて良きしは　蛙のみ」

中島「短歌？」

一馬「俳句でしょ！　五七五」

○　雪家邸・一馬自室（朝）

一馬、ベッドの中でスマホの画面を目を細めながら見入っている。
一馬「早ッ！　もうアップされてるよー」
机に移動しパソコンを立ち上げ、昨夜の事件について検索する一馬。動画を見つけ大きなモニターで確認しながら中島に電話をかける。
中島の声「はーい、もしもし」
一馬「昨日のドローン、もうアップされてる……」
中島の声「……知ってる〜俺も電話しようと思ってたところ」
一馬「お前もネット見てたの？」
中島の声「違うよ。テレビ」
一馬「えっ！　マジで」
一馬、ベッド上のテレビの電源を入れ、チャンネルを替えてワイドショーのコーナーを見入る。
中島の声「あの時、誰か撮っていたんだ？」
一馬「野次馬カメラと、防犯カメラもだよ」

○　雪家邸・居間

Ｔ「一週間後」
一馬の母、雪家智子（45）がキッチンで洗い物しながらテレビのニュースを見ていると、二階の自室から一馬が下りてくる。そのテレビから急に女性の悲鳴が響く。ちょうどテレビの横を過ぎた一馬は振り返り、智子も手を止める。テレビには、ドローンが女性の行く手を塞いでいる映像が流れている。
智子「(不思議そうに）一馬、この前話していたドローンなの？」
一馬「いや!?　……」
×　　×　　×
（フラッシュ）
初めて見たコンビニでのドローン。
×　　×　　×
ニュースキャスター「このドローンは何をしているんですか？」
解説員「警察への取材では、このドローンが突然女性の目の前に現れ、ドローンから音声がして『ブランド服を汚されたくなかったらこの袋に現金を入れろ！』その音声の後、ドローンの中央下部に水平に設置された直径１㎝、長さ 20 ㎝程の筒状の先端部分から、青色のペンキ状の物が発射され、ブロック塀を汚したということです」
ニュースキャスター「ドローンが人を脅したんですか？」
解説員「そういう事なんです。そしてこの女性は手持ちの現金二万七千円をドローンの袋に入れたということでした……」

智子「飛んでる姿だけでもちょっと怖いのに、女性脅かすなんてありえないわ（文句言いたそうに）一馬、あんたが見た正義のドローンって、これなの？」
一馬「違うよ、全く違うよ……」

○　警視庁捜査一課・江口班

捜査一課江口浩喜（45）課長代理の机の前に、同課主任松藤邦博（48）と、同課刑事島田　隆（29）が立ち、江口を見下ろしている。　同課新米刑事桜木久美子（23）が、お盆から机にお茶を置く。

島田「撃ち落としましょうよ、このドローン野郎！」
松藤「どうやって撃ち落とすんだよ？」
島田「簡単ですよ！　松っぁん。私の射的の腕前ご存知でしょ！」
松藤「確かにお前には『射撃』より『射的』の方がお似合いだ！」
江口「どっちにしろ、銃の使用はいかんぞ！」

江口、机を両手で押し椅子を１８０度回転して二人に背中を向ける。

島田「分かってますよ、代理。あんなもんね、ＢＢ弾で十分ですよ」
松藤「島田、おまえ分かった風なこと言うんじゃないよ。あのドローン結構ごっついんだぞ！　業務用だから……」
江口「業務用と言えば……松さん、入手先は洗い出せていますか？」
松藤「あっ、それが、難儀してまして――。どうやら、一台丸々入手ではなくパーツの寄せ集めで作っているきらいがあります」
江口「そっちからの線は難しいかぁ――」
島田「ＢＢ弾がダメとなると――残るは……女王様のムチですね！　10m位の長ーいので、どう？　クーちゃん！」
久美子「……」

島田、久美子に向かって両手を開き、ムチを打つポーズをとる。

江口「冗談やっとる場合か、島田！　電波発信元は調べてんのか？」
島田「勿論の論であります。それでは説明させていただきます」

島田、ホワイトボードを回転させ、調査結果を説明する。

島田「ドローン、つまりラジコン、最近のラジオコントロールでは、混線しない 2.4GHz の電波を、プロポと呼ばれる送信機から出して操縦するわけですが、今回その電波が使われている形跡がないみたいなんですよ。駆けつけることができた三件目の現場では計測器を持って行けたんですが、なんせ野次馬が多くて、計測結果がいまいち不十分と言うか……皆目見当が付きません」
江口「何やっとるんだ、君は？」

と机の端を立てた右手の中指でたたく。

松藤「どういうことだ？　ドローンって大っきいオモチャだろ……それとも小っちゃい宇宙人でも乗って、操縦しとるとでも言うのか？　……映画であったなぁ……顔面が開いて、中に小っちゃい宇宙人……」
島田「あっあの、可愛いヤツ」
　と松藤の方に笑顔で人差し指を向ける。
江口「映画の話はどうでもいい。仕事をしなさいよ！」
島田「代理、次回の現場では近くの怪しい車、全部あたりましょうよ……絶対しっぽ掴めますよ」
江口「なんでもいいから次は捕まえろ！」
松藤・島田「ハイ！　クーちゃん、コーヒーお願い！」
　久美子、顔をしかめて「イーだ」をする。

○　東京数理大学・研究室Ａ

　車のガレージみたいな所に家電やモーターなどのスクラップが散らかっている。理科室にあるような大きな机にパソコン、モニター、プリンターが置かれている。その横には専用の台に大きめのドローンが二機ある。一馬・中島、粗大ごみのような二人かけソファーに座っている。
中島「（あらたまった表情で）最初の事件から早、一ヶ月。すでに三件のドローン事件が発生しています。一件目は我々が居たコンビニで、これは族をやっつけた正義のドローン。二件目は女性をペンキで恐喝した悪のドローン。そして三件目は深夜、コンビニでたむろしていた若い男性数名から女性客が絡まれているところでドローン参上。煙放射器のようなもので男たちを蹴散らし女性を救助、つまり正義のドローン」
一馬「確かに、二件目が何なのかっていうことだよね？」
　と軽くため息をつき、テーブルのコーヒーをとる。
中島「やっぱり、あれじゃないの？」
一馬「何？」
中島「二種類の組織……が、ある。ということでは……」
一馬「そんなことあるかな？　ほぼ同時期に二つも出てくるなんて……」
中島「それかあるいは、二件目三件目は別々の模倣犯とすると、三種類の組織かもしれんぞ！」
一馬「それは、ないっしょ！」
　と、ソファーから立ち上がり二機のドローンに触れる。
一馬「あのさ、俺たちの研究室も半年前までは、ドローン使って研究・改造なんかしたりしていたわけで、今回の事件もちょっと運命的なもん感じるんだけど、お前は？」
中島「同感！　いつも同じこと考えてんな、俺たち」

一馬「今でも警察無線傍受できる？　前そんなことやってたよね！」
中島「そう来ましたかぁーやっぱり」
　と頭を垂れる中島。

○　駅前（夜）
　ワゴン車を一人で運転する江崎和彦（27）車内は運転席と後部が黒いカーテンで仕切られている。後部には大きめのドローンが一機鎮座し、その横のテーブルにはモニターと送信機も設置されている。駅前のロータリーをゆっくりと舐めるように走らせた後、少し離れた路地に車を止める。
江崎「居た居た、カモ女が……」
　ワゴン車の前方１００m程を女性が歩いている。ニタニタと笑いながら煙草をもみ消し、後部座席に移動する江崎。ドローンの電源を入れ、モニターを見ながら左手で送信機を持ち、右手でワゴン天井のスイッチを操作する。大きめのサンルーフが開きドローンが自動でせりあがってゆく。
江崎「ドロドロ発進！」
　ワゴン天井からドローンが飛び立つ。すぐに女性の後方に付けドローンのスピーカーから女性に話しかける江崎（スピーカーの声質は変えられている）。
　　★（図-２参照）
江崎の声「お嬢さん」
女性「キャーッ！」
　と、その場に倒れ込む。
江崎の声「ニュースを見てるなら知ってるでしょ。袋の中に現金を入れなさい。早く」
　ドローンと向き合い、しばし固まっている女性。
江崎の声「きれいな服が汚れるよ～」
　ニュースで知っていた女性は震えながらも財布からあるだけの紙幣を掴み、袋へと投げ入れる。と同時にパトカーのサイレンが聞こえ始める。
江崎「何だ何だ……もう警察来ちゃったの？」
　ドローンをワゴン車に回収する間もなく、パトカーは大通りから路地に入り女性の前に停車する。警官Ａが女性を保護し、警官Ｂが上空のドローンと近くを見回している。
江崎「やばいよやばいよ――」
　江崎、左手に送信機だけ持って、素早く運転席に戻りエンジン始動、ゆっくりと前進しながら前方に見えているドローンを左手のみで器用に操り警官Ｂの注意をドローンに向けさせる。パトカーの手前に差し掛かり停車する江崎。
江崎「何かあったんですか？」
警官Ｂ「あれだよ！」

上空のドローンを指さす警官Ｂ。江崎、助手席に置いた送信機の上にタオルをかぶせた状態で、その上から左手の人差し指と小指の二本だけを僅かに動かして操縦している。

江崎「あっ！　ドローンですか？」

江崎、あたかも今気づいたように答えながら、同時にドローンを大通りの駅前方向へと数十メートル移動させる。

江崎「駅前に逃げましたよ！　お巡りさん」

警官Ｂ、パトカーに飛び乗り、バックで大通りに出て駅前に向かう。一方、江崎は、スピードを上げて駅前と逆方向にある閉店後の大型電気店の駐車場に入り込む。停車後、慌てて後部座席に移動、モニターでドローンからの映像を確認すると、パトカーの周りに多くの野次馬が集まっている。

江崎「ちょっとだけ遊んでやるか！」

江崎、短い溜息を吐いた後、駅前上空で宙返りなどのパフォーマンスをして見せる。その操縦の完璧さに野次馬から拍手まで起こる始末。

警官Ｂ「見世物じゃないから――」

野次馬に圧倒される中、ドローンから何かが、ひらひらと落ちる。

江崎「あああああ――忘れてた――お金が落ちてく……」

警官Ｂ「こら、お金はこちらに返しなさい！　　被害者のお金だぞ！」

お金の回収にあたふたする警官Ａ・Ｂ。その隙にドローンを駐車場まで帰還させ無事回収する江崎。

○　所轄警察署・ロビー

報道関係者が詰めかけ副署長（56）の会見が始まるのを待っている。

記者Ａ「まだかよ～」

記者Ｂ「あっ来た。あっちあっち」

記者Ｂの指さす方向に一同動く。階段を降りるや否や報道陣に囲まれる副署長。

副署長「押さないで、押さないで。昨夜の件、ちゃんと話すから」

と両手を前後に振って落ち着くように促している。

記者Ｃ「今回、所轄として現場急行できた理由お願いします」

副署長「それはですな……一部始終を電車から見ていた女子学生からの通報で、警ら中のパトカーがいち早く、現場に急行できたということですな、所轄としては！」

記者Ｄ「早く現場に着いたにもかかわらず、何故ドローン確保まで至らなかったか、お伺いいたします」

副署長「――それは――本庁からの応援を待つということで……待機……待機していた次第ですな――もう、もうよろしいかな」

報道陣に揉みくちゃにされながら階段までたどり着く副署長。
副署長「（不機嫌そうに）他にも仕事あるのよ、私にも……」

○　雪家邸・一馬自室

一馬・中島、駅前の四件目の事件について話している。一馬は出窓に掛け、中島は椅子に座っている。ノックの後、智子が缶コーヒーを二本持って入ってくる。
中島「智子さん、お邪魔してます」
智子「いらっしゃい、中島くん。はい、どうぞ」
と二人に缶コーヒーを差し出す。
中島「いただきます」
智子「あなた達、あの飛行機ロボットの話してたんでしょ？」
中島「正解！　智子さん」
一馬、長話になると察し、渋い顔をする。
智子「私も結構見てるのよー、あの関係のニュース。あなた達が最初に目撃したのが一件目、女性が被害に遭った二件目、三件目は女性を助けたやつ、そして昨日の駅前のやつで四件目だぞ！　中島くん！」
中島「智子さん、凄い！　コンプリートですね」
智子「そうなのよ、何か、あの映画に似てるんだけど……。中島くん、あれよ……昔の映画、ここまで出てるんだけど」
と中島の首を軽く絞める智子。
一馬「止めなよ、母さん」
中島、智子の手を軽く払い咳払いする。
×　　×　　×
中島「あの映画ですね！　……『ロボコップ』じゃないですか？　智子さん」
智子「そうだったわー『ロボコップ』よ！　ロボコップ気取りなのよ、あの犯人！　悪いこともするけど」
中島「そうか、ロボコップ気取りなんだ……」
智子「中島くん、よく正解した。夕ご飯食べていきなさい！」
中島「……ゴチになります」
一馬、顔を軽く引きつらせて二人を見る。
一馬「よくドローンからロボコップ連想出来たね二人とも。昭和だねー」
×　　×　　×
一馬・中島、夕ご飯を済ませ、部屋に戻ってくる。
中島「あー美味しかった。やっぱり智子さんの料理は最高だなー。おまえがうらやましいよ」

中島、満足げに椅子に座る。一馬、ベットの上で胡坐をかく。
一馬「警察無線、聞けるよね？」
中島「えっ、本当に追っかけるの？」
一馬「どうせ研究室、暇でしょ。付き合えよ！　警察も追いかけるけど、パトカーより俺たちのバイクの方が小回り効いて、多分いい」
中島「一日中なの？」
一馬「いやーそれはきつい。事件が集中している夕方以降の三時間くらいかな」
中島「そだねー。あとは、俺たちがバイクで移動する家と大学の近くで事件が起きれば急行できるって、訳ね」

○　東京数理大学・研究室Ｂ

構造理工学部の准教授、森和弘（40）がノートパソコンの画面に向かって必死に何か入力している。自宅療養を終え、二日前から研究室に復帰している。辺りには電子回路、モーターなどが整理され棚に並べられている。一馬・中島、開いているドアから入ってくる。
中島「教授、お久しぶりです」
森、ノートパソコンの画面を閉じ振り返る。一馬・中島、辺りを見回して椅子に座る。
森「まだ、准教授だけどね――」
中島「それは失礼しました、先生」
一馬「先生、お元気そうで……」
森「あー、約半年休ませてもらったから、この通り！　酒タバコも止めたし」
と、ガッツポーズをとる森。
森「お見舞いありがとうな、お前たち」
少しハニカム二人。
森「ちょっと聞いたんだが、お前たち。……ドローン事件、調べてるの？」
中島「ちょっとした暇つぶしなんですが」
一馬「実は俺たち、一件目の事件にたまたま遭遇してまして――それにドローンは研究対象でもありましたので、必然的に興味が」
中島「先生も興味津々でしょうよ、なんせ同業者みたいなもんですよね？」
森「……俺も犯人と同じってことか!?」
中島「すみません。『ドローンに詳しい』という意味で、ですよ」
森「ドローンは趣味だ。それで何か掴んだのか？」
一馬「俺たち、追っかけてみようかなと思ってます」
森「何を？」
一馬「運よく出くわしたらバイクで追っかけるんです、ドローンを。そして発射基地を突

き止めるんです」
森「（笑い加減で）発射基地かぁ、それは大仕事だ。せいぜい頑張れ！」
一馬・中島「ハイッ！」
　研究室を出る三人。森とは反対方向に歩く一馬・中島。

○　同・廊下
中島「だけど、一馬。発射基地って言っても、ワゴン車みたいな車から操縦している予想だから、その車を突き止めるってことだよね――」
一馬「多分ＢＯＸカーだと睨んでるけど、ひょっとしたら少し離れた部屋から暴走族の爆音を聞き、コンビニ近くと見当をつけて何百メートルか飛んできたのかもしれないし……」
中島「……」

○　同・中庭
　ベンチに腰かける二人。
中島「電波的に考えると、ドローン本体は河川敷など見通しのきく場所であれば２㎞の電波到達距離があるが、ドローンに搭載されているであろうカメラの電波到達距離は５００ｍで、しかも見通しの良くない街中であるので半分の２５０ｍというところだろうか……」
一馬「操縦者は半径２５０ｍ以内に居る必要性がある、か……」
　×　　×　　×
　前方から一馬・中島の先輩である生田正信（21）と生田裕子（21）が近づいてくる。
　二人は双子である。
正信「いつもお二人、仲が喜ばしいことで！」
裕子「私たちと同じでしょうね、正信」
　正信・裕子、ちょっと気取った調子で話しかける。
中島「先輩たちもいつも一緒ですね」
正信「双子ですから。何か」
中島「（ちょっと引きながら）いえ、別に何も……」
裕子「あなた達、ドローン探偵団か何か始めたって聞いたけど？」
一馬「探偵団？」
中島「俺たちの事ってどう広がってんのー」
裕子「ぐちゃぐちゃ言わない！　面白くなってきたら教えて！　お願い」
　正信・裕子、一馬・中島を見下ろし、長ーい視線のまま立ち去る。
　×　　×　　×

一馬「変な双子だけど、二人して凄い博士号持ってたんだよね？」
中島「そんなこともあったねー」
　ベンチに座ったまま空を見上げる二人。
F・OUT

○　警視庁捜査一課・江口班（夕）
　事件の発生を知らせるアナウンス「三田川区、花立公園、盆踊り会場にドローン発生！」
江口「出てきたか！」
　島田から室内の無線機に連絡が入る。捜査員一同、無線機に目が行く。
島田の声「代理、我々すぐ近くにいます。急行します」
江口「くれぐれも慎重に、人命第一！　人がいっぱい居るんだからな！　松さん、頼んだよ！」
松藤の声「了解です」

○　東京数理大学・廊下
　一馬・中島、一緒に帰宅しようとしていたところで警察無線を傍受する（傍受した音声を、スマホに自動転送するようにしている）二人、ストップモーションで聞き入る。
一馬「近くだ！」
　駐輪場のバイクに飛び乗り現場に急行する二人。一馬のバイクは、４気筒４００ccのストリートバイク。中島のバイクは、単気筒２５０ccのオフロードバイク。

○　盆踊り大会会場
　松藤・島田が乗る覆面パトカーが会場横の駐車場に到着する。一馬・中島も程なく到着。駐車場反対側の道路から会場を見る。やぐらの５m程上空にホバリングしているドローン。参加者はやぐらを中心にドーナツ型になってドローンを注視している。会場の男性数名が自分が履いていた草履をドローンに向かって投げているが当たらない。そこへ入っていく松藤・島田。
島田「警察です。物を投げないでください」
ドローンの声「それじゃあ、踊ろうか。ポリスダンス！」
　と、ドローンから声が聞こえると同時にドローン下部が回転しながらロケット花火のようなものを参加者めがけて連射する。女性の悲鳴が響く会場。
松藤「みんな頭を隠して逃げろ！」
島田「松っぁん、俺は周りの車見てきます」
松藤「分かった。応援が来たら俺もそっちに回る」

島田、辺りの不審車を一台一台あたる。その中の一台のワゴン車がゆっくり動き始める。同時に連射を終えたドローンも会場を飛び去ろうとしている。

島田「ちょっと待て！　そこのワゴン！」

と声をかけワゴン車を追いかけ始める。

島田「こらー！　止まれ！」

走って追いかける島田の前に小道から出てきた中島のバイクが立ちはばかり両者倒れ込む。

島田「警察だ、ちょっと借りるぞ！」

と中島のバイクに乗りワゴン車を追う。

中島「ちょっと待って！」

バイクを追うが追いつかない中島の横に付ける一馬のバイク。

一馬「うしろ乗れ！」

○　盆踊り大会会場から少し離れた大通り

ワゴン車、島田バイク、一馬・中島のバイクの並びで走行している。いつの間にかワゴン車の前方にドローンが飛んでいる。

島田「止まらんかー！」

と、ワゴン車の横にバイクをつけ怒鳴るも、止まろうとしないワゴン車。信号無視をするワゴン車に恐る恐るついてゆく一馬・中島のバイク。二度目の横づけをした島田バイクにワゴン車が急ハンドルを切って体当たりする。

島田「アアーッ！」

島田、バランスを崩して対向車線にはみ出し対向車と接触し投げ出される。

×　　×　　×

ニタつく犯人の口元。

×　　×　　×

一馬「あいつ大丈夫かぁー」

中島「俺のバイク、弁償してくれるよね？　警察」

一馬「……」

ワゴン車が赤信号で、停車線で止まる。一馬バイクもすぐ後ろに停車する。と同時にバックしてくるワゴン車、倒れたバイクの上に乗りかかり潰す。

×　　×　　×

ニタつく犯人の口元。

×　　×　　×

一馬「マジ、ムカチータゼ！」

走り去るワゴン、怒る一馬。サイレンは聞こえるが、見えないパトカー。潰れたバイ

クを起こす二人。一馬、スクラップ寸前のバイクのセルボタンを押し続け、やっとのことでエンジン始動する。

一馬「かかった！」

中島「『かかった』って、乗る気なの？」

一馬「乗れるっしょ！」

ヨレヨレになったハンドルを握りバイクにまたがる。

一馬「……二人は乗れないかも」

中島「どうぞ、お一人で」

と一馬を一人で送り出そうとする。

一馬「俺追いかけるから、パトカーが来たら乗せてもらえばいいよ……」

中島「分かった」

ヨレヨレのハンドルで黒煙を出して追いかける一馬。

○　ある倉庫の駐車場

またもや難を逃れドローンを回収しようとする江崎。ワゴン車のサンルーフが開く。

江崎「ああー、今日は捕まると思ったけど、ドロドロ、ギリギリセーフってか」

ニタ笑いをしてドローンを車内に収め、サンルーフを閉じようとする江崎の前にボロボロの一馬バイクが止まる。

一馬「見っけ、犯人」

江崎、バイクに気づき表情が強張る。後部座席からゆっくりと運転席に移ろうとする。

一馬「それ以上動くな、犯人！」

その声に固まる江崎。ちょうど運転席と助手席の間に中かごみになる。

一馬「ちょっと話しないか？　犯人さん」

江崎「……」

一馬「今迄のドローンは全てあんたなのか？」

江崎、ゆっくりと首を横に振る。

一馬「俺と友達のバイク、どうしてくれんのよ、ったく――」

江崎のM「長居は無用なんだよ……小僧」

ゆっくりとハンドルの下に右手を伸ばす江崎。一馬が一瞬下を向いた瞬間、ハンドル下のボタンを押す。「ヒューッ！」と音がすると車の下から全長 10 ㎝程のロケット弾が 3 弾同時に発射される。

一馬「危ねぇーッ」

どうにかロケット弾をよけるが、中の一発がバイクのタンク下に刺さり爆発、タンクの燃料にも引火し再度爆発、大きな黒煙を上げ、辺り一面を覆う。江崎は運転席に座りエンジン始動しようとするがかからない。サイレンが近づいてくる。風が吹き、煙

が流れるとパトカーがワゴン車を取り囲んでいる。
江崎「ゲームオーバー……うまく逃げたのに、なんで……おれ左手だけでドロドロ操縦できんのに、なんで……」
顔の横の左手の指をひらひらと動かしながら警察に確保される江崎。
×　　×　　×
中島、パトカーから降り一馬に駆け寄り、ぐったり倒れ込む躰を支える。
一馬「はぁ〜、パトカー来ないのかと思ったぁ〜」
中島「刑事さんに一馬の携帯番号言って場所特定してもらった」
一馬「アッ、ところであのバイクの刑事さん、どうなった？」
中島「無線で聞いたけど、『命に別状なし、軽傷』だって」
一馬「対向車にぶつかって、あんなに飛んでたのに『軽傷』!?　しかもノーヘルで」
松藤・島田が一馬のところに来る。島田は服がボロボロになり足を引きずっている。
松藤「君たち二人、ご苦労だったね！　お手柄だよ。明日の朝刊、一面だ！」
現場規制がひかれる中、辺りには報道記者が集まってきている。中島の腕の中で瞼を閉じる一馬。

○　所轄警察署・署長室
犯人逮捕に大いに貢献したということで、警察署長より表彰状と金一封を渡される一馬・中島。記者たちが写真を撮っている。その場を取り仕切ろうとする副署長。
副署長「ハイ、その辺で写真終わろうかー。質問の時間ちゃんと取ってるから安心して」と可愛めの女性記者の両肩を気安くポンポンと叩きながらニコニコ顔を振りまく副署長。一同、椅子に座る。
男性記者「質問いいですかー」
副署長「こら、君。順番というものがあるでしょう。レデェファーストでしょうが！」
あきれ顔の男性記者、ニッコリする女性記者。副署長、女性記者の両肩を両手で包み、持ち上げ、立たせる。少し嫌がる表情をする女性記者。
副署長「ハイ、どうぞ」
女性記者「お二人はどういう経緯で盆踊り大会会場にバイクで来られていたのでしょうか？」
一馬「実は中島と僕は、一件目のドローン事件の時、現場に居合わせてまして、それで何となく興味が湧いたというか、調べたくなったというか……」
女性記者「それでバイク二台で追跡したのですね？」
一馬「ハイ、バイクの方が小回り効きますし、実際パトカーより早く行けましたし……」
副署長「（ムッとした表情で）しかし、最後で犯人取り囲んだのはパトカーなんだから……分かるよねー君たち」

記者たちを指さし訴えかける口調の副署長。無視する記者ら。
男性記者「今回、お二人はプロの警察以上に活躍されたと思いますが……」
副署長、男性記者の話を中断する。
副署長「この子たちはまだ学生なんだよ〜。今回は、たまたまで、言ってみれば、少年探偵団、あっいや、ドローン探偵団みたいなものだよ。あくまで警察がベースで、ベースで動いてますからねー」
一馬のM「おまえも『探偵団』扱いかよ」

○　雪家邸・居間（朝）
朝刊の中ほどに表彰式の記事がそこそこの大きさで載っている。テーブルでその記事を頭を縦に振りながら、お茶を飲み飲み読んでいる智子。一馬、トイレから出てくる。
一馬「いつまで読んでるの、母さん」
智子「だって、我が子のお手柄記事なのよ、じっくり読んで頭に入れておきたいわ。それに、結構イケメンに撮れてるじゃない、二人とも……自信持ちなさいよ！」
一馬「えっ。中島はともかくとして。俺も？」
智子「これで終わるといいね、この事件」

○　東京数理大学・学生食堂
一馬、同じ研究室の学生達とランチしている。
学生Ａ「犯人と向き合って怖くなかった？」
一馬「バイクで追いかけている時は夢中で怖くなかったけど、確かに一対一で対峙したときは不安になったかなぁ」
学生Ｂ「一歩間違えれば、犯人からやられてたんじゃないの？」
一馬「そだねー、中島と警察があと少し遅かったら、やられた上に逃げられていたかもねー」
×　　×　　×
（フラッシュ）
一対一で対峙した時に見せた犯人のニタ顔。
×　　×　　×
女子学生Ｃ「だって、あの犯人、結構凄い経歴だったでしょ！」
女子学生Ｄ「一浪だったけど東大の理工出て、あのＳＳ精機の第一開発部でＡＩ使って新しい発想のプログラム作ってたとか、何とか……ビジネス誌の特集にもなったりしていて、バリバリやってたんだけどー、急に辞めたって書いてあったよねッ」
女子学生Ｃ「それにちょっと、影のあるイケメンって感じ……」
女子学生Ｄ「ああいうのがタイプなの？　確かにいい男だけど……」

ちょっと白けムードの男子学生ら。

○　謎の男の部屋・部屋の一角

光が微かに射す部屋。煙草をひとふかしし、灰皿に煙草をねじ消す。男の口元だけ微かに映し出される。壁には都心の詳細な大きな地図がある。

○　木下バイク店

一馬・中島、バイク店店主木下弘嗣（51）の困惑顔の中、バイクの修理査定を受けている。

中島「オヤッサン、いつ頃仕上がります？」

店主「二台とも結構逝ってるからね〜。新車にしたら、どう？」

一馬「そこまでお金出ないみたいで……」

店主「お前ら、金一封貰ってたじゃない!?」

一馬「すずめの涙、程度です」

店主、煙草に火を付け渋い表情を見せる。

店主「分かったよ〜、部品届いてから一週間で二台仕上げてやるよ！」

中島「流石、オヤッサン。頼りにしてます」

一馬「俺たち二階で飯食っていきます。一番高いの注文しますから……」

○　喫茶店「ジョイフル坂田」

バイク店の二階には店主の妹、坂田美香（49）が経営する喫茶店『ジョイフル坂田』がある。窓際の席に座る二人。

美香「いらっしゃーい。新聞に大きく出てたじゃない！　二人とも見直したわ！」

中島「大したことありませんよ」

一馬「『少年探偵団』だからな」

三人、失笑の後、美香が伝票とボールペンを取り出す。

一馬「いつもの大盛りの安いやつ、お願いします」

×　　×　　×

二人、食後のコーヒーを飲んでいる。

一馬「盆踊りからすでに十日、何も起こらないことをいいことに警察は、全てのドローン事件を江崎の犯行にしたがってる」

中島「その通り。別者がいて必然だねー。そもそも犯行が、正義と悪の二つに分かれるし、ドローンのタイプもちょっと違うし」

一馬「ドローンのタイプは複数保有していれば不自然ではないけど……あのカードだよ」

中島「……ああ、あのカードね。一件目のカードは持ってるよね、一馬」

一馬「ああ。……今まで五件の事件のうち、一件目、三件目が正義のドローン、一件目のカードはあるけど三件目のカードが存在したかどうかが不明」
中島「それは絶対あるよ、警察も分かっているけど隠蔽してるだけのことで。あれ……あれなんて書いてあったっけ？　カードの、短歌の反対側」
一馬「俳句の裏面でしょ」
中島「そう、五七五五の」
一馬「(口元引きつらせて）まッ、イッかー。たしか……ＴＡＢ　ＣＯＰ　俺真警」
中島「ＴＡＢ　ＣＯＰのＴＡＢがイマイチ解らないけど、俺真警は『俺が真の警察』ってことでしょ！　つまり人を助けるドローンでしかないわけであって……」
一馬「でも、次の事件起こったら、江崎とは別の犯人、確定でしょ！」
中島「そだねー。(ちょっと迷惑そうな顔で）また追うってことかぁー」
一馬、飲みかけのコーヒーをスプーンでかき混ぜミルクを垂らす。コーヒーの黒の中に白い渦ができる。

○　東京数理大学・学生食堂

学生食堂の受け渡しカウンターでカレーライスを受け取ろうとしている中島に廊下を走ってきた一馬が駆け寄る。
一馬「カレーライス、勿体ないけど、行こう！」
中島「何々？」
一馬、カレーライスを好みの女子学生に渡す。
一馬「これ食べていいから！」
キョトンとする女子学生。中島「おおー」と叫びながら一馬に引っ張られ学生食堂を出てゆく。
一馬「警察無線、鳴ったでしょ！」
中島、引きずられながら、スマホを取り出す。
中島「あっ、電源切ってたー。それで何処？」
一馬「富士山」
中島「えっ、富士山？　遠いでしょうよ！」
一馬「ふじみややま（藤宮山)、言いにくいから富士山だよ」
中島「えっ、あの……二日前に３才の女の子が迷子になってる山？」
一馬「そう」
中島「それでもここから遠いでしょ？」
駐輪場に着く二人。
一馬「時間が勿体ないから、あとは走りながら話すから、スマホとイヤホン、ちゃんと付けて」

スマホをイヤホンで話せる状態にして走り始める二人。
一馬「無線によると、富士山上空に現れて花火みたいなものを二、三発撃ったみたいなんだ」
中島「でも、族とか人とか、狙ってないんでしょ？」
一馬「ああ、俺が思うに今回は女の子を探しに来たんだよ」
中島「えっ、そんなことまでするの？」
一馬「まっ、俺の勘だけど……」

○　藤宮山・登山道入り口

現場に到着し辺りを見回す二人。捜索隊のテントが張られて警察・消防の車両も数台見える。
中島「もう居ないよ、一時間近くかかってんだから～」
一馬「もう一回現れるよ、絶対」
中島「何で分かんの？」
一馬「探偵団の勘ってやつで……」
中島「……」
一馬「俺の推理だと、女の子を見つけたドローンは花火を打って捜索隊に知らせようとしたが、うまく伝わらず、そのうちバッテリーの残量が無くなりかけたので一旦引き返している途中なんだよ……たぶん」
中島「本当かー……仮に一馬の推理が正解だとしたら警察はどこまで分かってんのかな？」
一馬「多分、同じように考えていると思う」
話している二人の横に車が急停車し、松藤・島田が降りてくる。驚く一馬と中島。
松藤「何で君たち、ここに？」
一馬・中島、バツの悪そうな顔をする。
島田「探偵団のお二人でしたね！」
嫌味たっぷりの島田。すかさず対応する中島。
中島「俺たち、ツーリングで来てたんですよー。なー一馬！」
一馬「そうですよー。……（思い付いたように）ほらっ、見てください！　バイクの修理出来上がってきたんでー、それで仕上がり確かめるためにーですよ」
松藤「確かに前回は、このバイクのお世話になったけどね……」
と、バイクに触れる。島田、バイクのあちこちを見る。
一馬「松藤さん、今『前回』って言いましたね？」
松藤「……」
中島「そういうことは、今日が『今回』ということですか？」
島田「お前たち、いらぬ勘繰りはやめろ！」

一馬「図星、ですね。何か女の子の事件と絡んでいるんですか？」
松藤「お前たちには、かなわんなー。少しだけ教えてあげよう。その代わり何か掴んだら警察にも教えてくれるかな？」
　と一馬・中島に今回の件を話し始める。その途中でドローンが再来する。
島田「松っぁん！　あれ！」
　島田が指さした方向に一同目をやる。
松藤「島田、ドローンの停止位置、正確に把握しろ！」
島田「ラジャー！」
　車から双眼鏡を取り出す島田。捜索隊長に電話する松藤。バイクにまたがり待機する一馬・中島。
島田「お前ら、どうせあのドローン追いかけるんだろ。後でちゃんと追跡結果聞かせてもらうからなー、よろしく」
　ドローン、山の中腹にホバリングし花火を発射する。松藤、携帯電話の話口を島田の口元に近づける。
島田「松っぁん、ドローンの位置は、送電線の一番高い立塔から東に……約……30m位です」
松藤「聞こえましたか？」
捜索隊長の声「ありがとうございます。聞こえました。今から向かわせます」
　ドローン、停止位置を中心に円を描き５周ほど旋回したのち停止位置を離れる。
一馬「行こう、中島」
中島「ラジャー」
　見失わないように慎重に山を下りた後、ドローンと並行して走る二台のバイク。

○　田園地帯・新しいバイパス道路
　進行方向左手にドローンを見ながら走るバイク。
中島「このままだと街中入っちゃうね」
一馬「そだねー、二手に分かれよう……中島はそのまま街に入って！　俺はドローンの北側に回って街に入る」
中島「ラジャー……島田刑事が移っちゃたよー、もうー」

○　街中
　ドローンを挟むような体制で街中に入るバイク。
一馬「ああ、太陽が眩しい……今どこ飛んでる？　中島」
中島「こちらは良好、ちゃんと把握できてる」
一馬「了解！　俺はドローンの真下に移動する」

中島「一馬、ちょっとビルが高くなってきて、見失いそう。……ああ、信号で止まる……かも！　早く下に行って！」
一馬「分かった」
×　　×　　×
中島「一馬、追えてる？」
一馬「ちょっと見失ってるー。そっちもダメか？」
中島「右に同じ。信号無視もやったのにー」
一馬「了解。こちら笹山交差点で停まってます。合流願いします」
中島「ラジャー……もう癖になっちゃった」
一馬「それは厄介な癖だねぇー」

○　街中の公園・駐車場

一馬、バイクのセンタースタンドを立て横座りしている。中島、公衆トイレから出てくる。

中島「ここって、森教授のマンションの近くだよね？　……ああ、准教授かー」
一馬「（うつろな表情で）そだねー」
中島「先生宅行って何か食べさせてもらおうよ？　腹減ったー」
一馬「多分、今日は居ないよ。実家に帰るって言ってた」
中島「あ、そう。じゃ一馬おごってよ？」
一馬「そだねー……俺も癖になっちゃった」
中島「カーリングの見過ぎだよ」
一馬「今度やろうよ、カーリング！」
中島「どこでやんのよ？」
一馬「例えば……」

○　雪家邸・居間（夕）

一馬・中島、ソファーに座ってテレビのニュースを見ている。その後ろで料理している智子。女の子の無事を伝えている。

智子「女の子見つかって、本当に良かったわ。この子のおじいちゃん、生きた心地しなかったでしょうねー」
中島「やっぱり出てこないよ、ドローンの話」
一馬「そだねー」
中島「止めなさい、『そだねー』」
智子「もしかして、あんたたち、その現場も行ってるの？」
一馬「……」

智子「そんな時間あったら勉強しなさいよ！　勉強！」
一馬「ハーイ」
×　　×　　×
料理ができあがり、テーブルに着く三人。
中島「智子さんの料理、いつも美味しそう！」
智子「中島くんだけよ、そう言ってくれるの……」
と一馬を横目で見る。
中島「色どりから違うんですよ、このあたりとかー」
智子、得意気に頭を縦に振り中島の指さす料理を見ている。
中島「早速いただきます」
智子「どうぞ、いっぱいあるからね。中島くん」
中島君「ハーイ！　智子さん」

○　木下バイク店
店先で店主と中島が談笑している。そこへ島田が乗った車が停まる。
島田「やっと見つけたよ、中島君」
店主、怪訝そうに中島を見る。
中島「オヤッサン、こちら刑事さん」
島田、店主に軽く会釈をして中島を店横に引き出す。嫌がる中島。
島田「約束しただろうが……報告しなさいって！」
中島「すみません。忘れてました……」
島田「それでどこまで追えたの？」
中島「それが街中まで追跡できたんですが、笹山交差点辺りで見失って……」
島田「それだけ？　ほかに何かあるでしょ？　怪しい車が走ってたとか……。篠山って言ったら山から結構距離があるんだよ、ワゴン車みたいのが近くに居るはずでしょー」
中島「いやっ、本当にそんな車居なったんです。居たとするならば、街中に入る手前のバイパス道路から一緒に走っているはずなんです」
島田「あ、そう。じゃ前の現場に似ている状況とか、同じ車や人を見たとか、ないわけ？」
中島「(思い出したように）あっ、強いて言えば、……あっ、それは関係ないかー」
話を途中で止める中島の頭を軽く小突く島田。
中島「先生のマンションが近くにあっただけですよ」
島田「先生って誰？」
中島「うちの大学の森教授。教授じゃなくて准教授でした」
島田「あ、そう。ありがとう」
島田、中島の肩に手を回し軽く二、三回叩いた後、車に乗り込む。

中島「先生に会ったとしても僕の名前出さないでくださいよー」
島田「考えとく……」

○　大きな国道（早朝）

道いっぱいになって走るバイクや車、約二十台。旧車會と呼ばれる暴走グループ。警察に追われるとバラバラに散り、ふたたび大通りに集結するというスタイル。ドローン事件一件目の時の団員Ａも参加している。先頭を走る旧車會リーダー鮎川昭二（38）のバイクの前に現れるドローン。それに気づき車両を次々と停止させる一同。

鮎川「なんですとー」

団員Ａ、リーダーの横に停車する。

鮎川「あれかー、話してたの？」
団員Ａ「そうです。たぶんあの時と同じやつです」
鮎川「（ふざけた感じで）ってことは、今から始まるのー……花火大会？」

一瞬、向かってくると思いきや、逃げるように側道に移動するドローン。

鮎川「追え！」

側道に入り追いかける族一同。逃げるドローン。１００メートル程進み、ふたたび新しい広い道に出る。工事したての新道。スピードを上げるドローン。同様に走りやすい新道でスピードを上げ追う族一同。その先頭を走る団員Ａ、中ほどを走る鮎川。

×　　×　　×

（フラッシュ）

ドローンを追う団員Ａの目。鮎川の目。

×　　×　　×

○　新道・工事中の区間

しばらく走り、先頭の八台のバイクが、次々とクラッシュし転倒する。急ブレーキで停止する後続車。

×　　×　　×

（回想）

新道に誘き寄せる前に、「工事中」の通行停止板を器用に移動させるドローン。

（回想終わり）

★（図-３参照）

×　　×　　×

まんまと工事中の段差に転倒したバイクを見回した後、ドローンを見上げる鮎川。

団員Ａ「痛てぇー」

鮎川、団員Ａを睨みつける。目をきょろきょろさせ、なぜか申し訳なさそうに下を向

く団員Ａ。ホバリングのまま例のカードを一枚吐き捨て、立ち去るドローン。そのカードを手にし握り潰す鮎川。パトカーのサイレンが近づいてくる。ドローンの視線に切り替わる。

Ｆ・ＯＵＴ

○　警視庁捜査一課・取調室

新道での一件で一人だけ逃げ遅れた団員Ａが、松藤・島田から事情聴取をされている。

団員Ａと島田が机を挟み座っている。松藤、団員Ａの後ろに立っている。

島田「ウソつけ、この野郎！」

団員Ａ「マジっすよー。俺たち、ただ追いかけていただけですよー」

島田「ドローン一台にバイク八台がやられた!?　しかも武器を使わずに……警察より凄いじゃねーか、この野郎！」

島田、団員Ａの脚を小突きながら松藤の表情を覗き込む。

松藤「島ちゃん、それくらいで……こいつもある意味被害者かもしれん」

団員Ａ、薄ら笑う。

島田「調子に乗るな！　お前らが存在しなけりゃ、こんな事件も起こらなんだよ！」

○　コンビニ・駐車場（夜）

一件目の事件が起きたコンビニで団員Ａとその彼女がバイクを横に地面に座っている。

団員Ａ「これ見てくれよ～、こんなにボコボコになってさー」

と新道の一件でバイクの凹んだタンクに手を当て彼女に説明する。

団員Ａ「頼むよ～、修理のお金出してくれよー」

彼女、タンクを見た後、スマホに目をやり無言のまま。そこへ自転車二人乗りで一馬・中島が現れる。中島一人だけコンビニのトイレへ向かう。団員Ａの方に目を向ける一馬。

一馬のＭ「あの時の族の一人だよね……それと彼女か」

団員Ａ「こうなった話聞いてよー」

彼女、スマホを見たまま頭を縦に振る。

団員Ａ「この前、鮎川さんから誘われて走った時、また現れたんだよ、アイツが～」

彼女「なに？」

団員Ａ「ドローンだよ！　この前この道で現れたって言っただろ、あれと同じドローンがまた現れたんだよ」

彼女「で、」

団員Ａ「それで俺が先頭を突っ走って追いかけてやったのよ～。ドローンのやつビビッて逃げまくるから、もっと追いかけてやったら、（ここまで自慢げに、あとは小声）工事

中の道になっててこけたんだよ」
彼女「どの道？」
団員Ａ「湾岸沿いの青沼らへんだよ」
彼女「そんなとこまで行ってたの、私そっちのけで……」
団員Ａ「謝るよ〜、『彼女と出会って二年目の記念日』、なんて言えなかったんだよ鮎川さんに……せめて『誕生日』なら言い易かったんだけど……」
彼女「バカの上に、馬鹿正直……」
中島、コンビニから出てくる。一馬、顎を突き出し団員Ａの方を見る。つられて見る中島。

○　雪家邸・一馬自室

コンビニから買ってきた焦がし豚足スライスをつまみに発泡酒を飲む二人。
中島「さっき、コンビニに居たのは、あの一件目の族かー。一台だと、タンクの凹みが痛々しいね」
一馬「たぶん、あの時、先頭に居たやつなんだけど……いろいろ聞いちゃったよ」
中島「何々？」
一馬「七件目がすでに起きてたんだよ！」
中島「藤宮山の女の子を六件目とすると、七件目かー」
一馬「場所は、湾岸沿いの青沼付近の新道で、まだ工事中の道らしい」
中島、豚足の焦げた部分を美味しそうに食べる。一馬、自分もその焦げた部分を食べたかったような顔をする。
中島「それで——」
一馬「あっ、それであいつ（団員Ａ）が他のグループに誘われて、その新道で走っていると例のドローンが現れたみたいなんだ」
中島「そして花火の閃光を振りまかれて、やられたのか——」
一馬「いやーそれが違うみたいで……」
中島「だってドローンの武器って、ロケット花火と煙幕くらいじゃない？」
一馬「いやーそうなんだけど、違うんだよ、今回は。結構アタマ使ってるみたい」
中島「ＡＩ？」
一馬「ＡＩじゃないと思うけど、武器は使わずに、罠に誘き寄せてるみたいで」
中島「……!?」
一馬「つまり、ドローンがまず現れて、攻撃してくるかと見せかけて、ゆっくりと逃げ始める。すると追い駆けたくなるのが人情。調子に乗ってスピードを上げていたら、いつの間にか工事区間に入っていて転倒という顛末」
中島「なるほどね、上を見て走ってるから道路までは目がいかないかー。だけど、『工事

中』のプラカードみたいなのが置いてあるでしょうよ？」
一馬「だからな、そのプラカードをドローンが外しておいたってことだよ、事前に！」
中島「頭脳犯か……」
　一馬、焦がし豚足スライスの焦げていない部分を食べる。
中島「……そう言えば、『藤宮山、移動距離長かったでしょ問題』も解決してないよ……」
一馬「確かにあの移動距離はおかしい。バイパスにワゴン車がいたとしても長すぎる」
中島「犯人江崎みたいにワゴン車からの操縦なら、たぶん俺たち見つけてるはずだし……」
一馬「そうだな、近くから操縦してるって気配を全く感じなかった……」
　焦がし豚足スライスの最後の一枚を見つめる二人。

○　警視庁捜査一課・江口班

　松藤、捜査資料を持って江口の前に来る。江口、腕を組み課長の席で居眠りをしている。
松藤「代理、これ、見てください」
　江口、ゆっくりと目を開け机の上の資料を見る。
江口「なにっ、誰だこれ？」
松藤「あの大学生から、島ちゃんが聞き出してた准教授なのですが、念の為、洗ってみたんです」
　島田、机の資料を覗き込み、その捜査資料を手に読み上げる。
島田「一九八八年八月五日午後九時ごろ、横浜市××区県道に於いて、森隆之容疑者、当時40歳が、爆走する暴走族の中の一台に、ブロックを投げつけ、四名に重軽傷を負わせる（内一名は、二ヶ月後に死亡）。森隆之容疑者の長男、森和弘。現在、東京数理大学・構造理工学部准教授……ビンゴじゃないですか、松っぁん！」
松藤「事件の後、森一家は離散、長男の和弘は、相当な苦労をして今に至ってます。暴走族に異常な恨みがあっても不思議ではありません」
江口「偶然かもしれんが――あたってくれんか」

○　大学ロボコン選手権予選会場・控え室

　東京数理大学チームの控え室。十名ほどの学生が忙しく準備をしている。その中に応援で駆けつけている一馬・中島もいる。島田、通路越しに二人を見つけ、遅れ気味の松藤を気遣いながら控え室に入る。
島田「あー居た居た」
　松藤、汗を拭きながら少し遅れて控え室に入る。入り口に目をやる一同。
松藤「忙しいところ悪いが、ちょっと話いいかな？」
一馬「もうちょっとで終わるので待ってください」

島田、出場ロボットに気安く触れる。
学生「止めてください！　触らないで！」
島田「あっ、失礼。これってドローンのプロペラかなー？」
無視する一同。

○　同・ロビー
ジュース販売機の前の丸いテーブルチェアーに座る四人。
中島「……あーのど渇いちゃった……」
松藤、島田に千円札一枚を渡す。
島田「中島君は何？」
中島「レモンアップルの大きいサイズで」
島田「（舌打ちして）贅沢な。雪家君は？」
一馬「レモングレープのMサイズで。あっすみません、大きい方で」
島田「松っぁんは、いつものコーヒーですよね？」
松藤、一番上の左端にあるサンプルを指さす。
島田「マジですか！　レモンカナディアン!?、おれも冒険してみるか……」
島田、三人にジュースを渡し、レモンイグレシアス（四川風）のボタンを押す。
×　　×　　×
松藤「実は、おたくの教授、あっ准教授か、森准教授のことなんだが」
島田、「辛ーい」と舌を出し、松藤の話を中断する。
中島「（笑いながら）だから四川風なんですよ。ちっちゃく書いてあるでしょ、最後に」
島田、商品名に四川風を見つけ驚く。
一馬「ジョーク商品ですよ！　笑い話のネタにはなるんですけど、よく引っかかるんですよ、大の大人が……」
島田「早く言えよ、この野郎！」
島田、中島のジュースと勝手に置き換える。元に戻す中島。再度戻す島田。
×　　×　　×
一馬「森先生が何か？」
松藤「いや、二三訊きたいことがあってね」
中島「事件に関係あるんですか～」
松藤「森先生の研究室に居たんだよね？　二人とも」
一馬「今も居るんですけど、半年前に先生が休養されてからは動いてなかったんですが、先日復帰されたので、また忙しくなるかと思います」
松藤「なるほど」
島田「それでー、何を研究してたの？」

一馬「最初は、飛行時に於ける構造物質の高周波振動時の不可逆性について」
中島「分かり易く言うと、飛行物体のボディーをいかにして丈夫にするかってことです」
一馬「その後、具体的な事例としてドローンを使おうということになって。って言っても実質僕らがドローンをいじったのは三ヶ月程度です」
松藤「整理すると、九ヶ月前にドローンを研究材料にしたが、六ヶ月前に先生の休養の為に中断して今に至る。で、いいんだね？」
　中島、頭を縦に振る。
一馬「(強い態度で) そうですが、先生の専門は、マテリアルであって、物質の素材、性質の研究ですから、ドローンが専門ではないですので、念の為……」
松藤「時間取らせて悪かったね……」
　松藤・島田、二人を残してロビー玄関に向かう。

○　同・駐車場

　松藤・島田、車内に乗り込む。島田、エンジン始動し窓を全開にする。
松藤「探偵団、ちょっと怒らせたかな」
島田「気にすることないですから、あれぐらい。それより松っぁん、思い切って踏み込みましょうよ、先生宅に！」
松藤「馬鹿言ううんじゃないよ、まだ動機だけなんだから……」
島田「ってことは、張り込みで裏取るんですか～」
松藤「そういうことになるかもな」

○　走る車の車内

　江口より無線連絡が入る。松藤、レシーバーをとる。
松藤「ハイ松藤です」
江口の声「奴さん、大量にドローン関係の部品入手してたぞ！　立花班の協力で判明した」
松藤「了解です。ありがとうございます」
江口の声「張り込み、お願いしていいか？」
松藤「勿論です。島田とあたります」
　無線が切れる。浮かない顔の島田。
島田「張り込みはいいんですよ。ただ、立花（29）にまた借り作ったんが、ちょっと……」
松藤「しょうがない。しかしながら、捜査ははかどる」
島田「松っぁんも知ってるじゃないですかー、俺と立花が同期だって。……あいつがしゃしゃり出てくるのが癪なんですよ、いつもー」
松藤「同期だろうが班長だろうが、協力してくれるんだ、大目に見てやれよ」
島田「ハイ。松っぁんも年下の江口代理の下で頑張ってるんですからね～」

松藤「それを言うな」

○　河川敷広場・駐車場

中島、おもちゃのドローンを飛ばしている。堤防をバイクで走る一馬、中島を発見し、駐車場にバイクを停め中島に近づく。

一馬「久々に何やってるの～」

中島、視線はドローンに向けたまま。

中島「片手操縦の技～」

一馬、中島が片手操縦していることに気づく。右手の手の平に送信機を置いて左手の小指、人差し指を使って操縦している。

一馬「犯人江崎の神業に挑戦ってか？」

中島、ドローンを着陸させ振り返る。

中島「いや、天才江崎だよ！」

一馬「えっ、そんなに難しいの？」

中島「難しい……その難しい上に江崎はワゴンを同時に運転し、しかも警官と話までしている……神だ！……」

一馬「確かに島田刑事は、そう教えてくれたけど、犯人を……神って……」

広場のベンチに座る二人。一馬、持ってきた缶コーヒーを出す。

一馬「もっと練習して、神様に近づくの？」

中島「難しいけど、意外と癖になっちゃうかもね、片手操縦」

一馬「それより『富士山、移動距離長かったでしょ問題』だよ～」

中島「ラジコンの電波が届く理由、何か推理できた？」

一馬「俺の推理だと、街中から富士山まで三ヶ所ほどの中継局を置いて電波を増幅させているような気がする」

中島「ってことは、犯人は複数で中継車両が三台ほど居たってこと？」

両手を動かし、三ヶ所を表現する中島。

一馬「中継局が車かどうかは判らないけど……」

中島「それか違法無線みたいに出力の強い電波なら中継局無しに遠ーくまで届くけど、電波Gメンに、」

一馬「すぐに捕まるかー」

と中島の後を続けて顔を見合う二人。そこへ中島のスマホが鳴る。

中島「ちょっとごめん」

中島、横を向き、しばしスマホで話し、通話を終える。

中島「ニュージーランドに留学してる従妹からだった。遠ーくからでも今は、音質いいよねー」

×　　×　　×
一馬「(神妙な声で）中島、今なんて言った？」
中島「音質よくなったって言ったけど!?」
一馬「その前？」
中島「ニュージーランドに留学の従妹!?」
一馬「そのあと？」
中島「遠ーくからかけている……」
「ああー」と声をそろえ、中島のスマホを見る二人。
一馬「携帯、使ってんだ――」
中島「そう簡単じゃないけど、オタクなら改造したりして、ドローンに使えるか……」
一馬「(思い付いたように）あっ、それで富士山に再来した時、俺たちが見ていたあの時だよ、迷うことなく再来できたのも、ＧＰＳ機能を使ってたからだ。中島――」
中島、大きく頷づきながら、誰かに電話をかける。
中島「(少し偉そうに）島田刑事さん、中島ですがー」
一馬、とっさに中島からスマホを取り上げ電話を切る。
一馬「ちょと待てよ、中島。……これが本当だとすると、森先生が不利になるかも？」中島「なんで!?」
一馬「俺見たんだよ……半年前、休養される直前に……」
×　　×　　×
（回想）
研究室で数台のスマホを分解している森を不思議そうな目で見る一馬。
（回想終わり）
×　　×　　×
一馬「なんかの用で、研究室覗いたときに、先生が数台のスマホ分解していじっているのを見たんだよ。たしか先生は、人から頼まれて修理しているって言ってたけど、俺には何か別の物作ってるように見えた」
中島「マジかよーそれ？」
一馬「それにこの前ドローン見失ったのも、先生宅近くだし……」
中島「オーマイガー！」
中島、ドローンを垂直上昇させる。見上げる二人。
Ｆ・ＯＵＴ

○　あるマンションの一室
森の部屋を監視できる部屋に監視機材を運び込む松藤・島田。
島田「マンションの最上階に住んでいるわけですから、もうビンゴですよ。松っぁん」

松藤「部屋の中はどれほど見えるか分らんが、ドローンさえ飛び立てば、ほぼ黒だ」
島田「探偵団には気の毒だがー、時間の問題だなー」
　松藤、双眼鏡を覗き込む。その横でカメラのセッティングをする島田。
松藤「結構大きいサイズの物置だなー」
島田「そこにドローンが入ってるんですよ！　もう物置だけ監視してれば任務完了ってことです」

○　東京数理大学・研究室Ｂ
　講義用の資料を整理している森の前に一馬・中島が現れる。突然、森の目の前に藤宮山事件の新聞記事を差し出す一馬。
　驚く森。
中島「この事件、ご存知ですよね？　先生」
森「何を藪から棒に……」
一馬「俺たちだけには話してください。真実を。……先生なんでしょ、ドローン？」
森「えー、僕を疑っているの？」
　表情を変えない森。
森「それより君たち、刑事さんと仲がいいの？」
中島「刑事さんに先生のこと少し聞かれたけど、俺たち先生のこと何も言ってません」
一馬「スマホのこともです……」
　少し目をそらす森。
一馬「俺たち協力したいんです。ーンなら……」
森「もういいかな。講義が始まる」
　森、憮然顔で研究室を後にする。

○　同・中庭
　ベンチへと歩く一馬・中島。
中島「怒ってたね、先生」
一馬「だけど、ハッキリしたよ」
中島「何が？」
一馬「先生がドローンだよ」
中島「なんで!?」
　ベンチに座ろうとするところで、座面にハンカチが投げ込まれる。生田姉弟がベンチの前に割って入る。
正信「お姉さま、どうぞ」
裕子「ありがとう。正信」

と正信が広げたハンカチの上に、日傘をさした裕子が座る。
裕子「中島君」
中島「ハイ」
裕子「探偵団のお仕事、面白くなってきたら教えてって言ってたわよね？　わたし」
中島「(恐る恐る）そうでありましたでしょうか？」
正信「警察とコラボして楽しくやってるって噂だが……」
一馬「コラボって先輩！　俺たち捜査協力しているだけなんです」
正信「それだけでも楽しいじゃないかー」
裕子「私たちを仲間に入れなさいっ」
中島「それはちょっと、」
と一馬を見る。
一馬「勿論です、先輩。今度連絡いたします」
納得気にベンチを去る生田姉弟。中島、意外そうに一馬の顔を覗き込む。ベンチに座る二人。
中島「気安く受けちゃって!?　あの二人、面倒なだけだよ」
一馬「確かに面倒だけど、頭いいし、お金持ちだし、多分使える」
中島「えっ、それよりさっきの話の続きだよ～」
一馬、中島に目配せした後、ゆっくりと話し始める。
一馬「新聞記事を先生に見せた後、俺が言っただろ「先生なんでしょ、ドローン？」って。そのあと先生は「えー、僕を疑っているの？」って言った。つまりあの事件でドローンが関係していたということを知っていたと推測できる」
中島「なるほど。あの事件でドローンが関係していることを知っているのは警察と捜索隊と俺たち二人だし、マスコミにも出ていない」
一馬「先生に何があったのか？　何故こんなことをしているのか？　あー」
と座ったまま、背伸びをする。
中島「先生から話を聞き出して、先生助けようよ！」
一馬「無理だよ。まず先生は心開かないよ！」
中島「……」
一馬「先生には、よっぽどの決意が、ある」

○　あるマンションの一室（夜）
Ｔ「張り込み二日目、午後９時２５分」
カメラを覗く松藤。島田、買い出しから帰ってくる。
島田「ハイ、松っぁん」
と、あんパンと牛乳を差し出す。

松藤「えっ、島ちゃん、刑事ドラマの見過ぎだよ〜、それに夜だし〜」
島田「分かってますよー、あんパンと牛乳は明日の朝の分です。今晩のディナークルーズは豪華ですよ〜」
　と、テーブルに他の買い出し品を並べ始めると、目を向ける松藤。
島田「まずは前菜に香味野菜のオードブル、それにスープ、メインは白身魚のオレンジソース和えです」
松藤「キムチに、カップスープに、サバの味噌煮、缶詰じゃねーか――」
島田「刑事のディナーって豪華でしょー！　デザートもあるんですよ……レモンイグレシアスのアイス！」
松藤「いらねーよ」
　江口より無線連絡が入る。松藤、レシーバーをとる。
松藤「ハイ松藤です」
江口の声「ドローンが出た。浅川台駅前の大通りにいる族を蹴散らしているみたいだ。所轄が急行している。奴さんの動きはどうだ？」
　慌ててカメラと双眼鏡を覗き込む二人。
松藤「（弱気な声で）ええー何も、動き、ありません」
江口の声「動きないのか？」
松藤「はーぁ」
江口の声「引き続き監視を」
松藤「了解しました」
　無線を切り、島田を睨む松藤。
島田「待ってください、松っぁん。さっきの楽しいトークをしていた時間は、たった15秒ほどでしたので、その間にドローンは飛び立ってはいませんよ……たぶん」
松藤「今、浅川台駅前だから、ここからだと10分位前に飛び立ってることになる。どっちにしろ奴さん、白ってことじゃねーか〜、島ちゃん？」
島田「そういうことになりますが、見てください」
　島田、森の部屋を指さす。
島田「一向にリビングに戻ってきません。操縦室に籠っているんですよ。まだ望みはあります。」
松藤「……」
島田「（気まずそうに）ひょっとしたら、おお、お風呂かもしれませんね」
松藤「それって完全に、白ってことじゃねーか〜」
島田「大丈夫です。操縦室に籠っているんですって……間違っても、風呂上がりの缶ビールってことはありませんから」
　森、タオルで頭を拭きながら缶ビール片手にリビングに戻ってくる。

松藤「何的中させてんだよ、島ちゃん」
島田「すみません、松っぁん」

○　警視庁捜査一課・江口班
松藤「すみません、代理。当てが外れました」
江口「振出しに戻ったなー」
島田「俺もう一度周辺洗ってみます」
　　と飛び出していく。松藤、江口に目配せの後軽く会釈、島田の後を追う。

○　喫茶店「ジョイフル坂田」
　　松藤・島田、階段を駆け上がり店内に入り込む。中島を見つけ駆け寄る。
中島「あっ、刑事さん」
　　松藤・島田、中島の横に座り込む。
島田「この前、電話してきた時、すぐ切れたけど、何か言いたげだったよね？」
　　下を向く中島の脇腹をつねる島田。中島、躰をのけぞらせる。
中島「言います、スマホです」
島田「何？　スマホ？」
中島「ドローンに改造スマホを載せておけば、見通しのきかない遠いとこからでも操縦できるかなーと」
　　一馬、トイレから出て松藤・島田に気づく。
松藤「やっ、雪家君」
島田「今、中島君から聞かせてもらった。ドローンにスマホを組み込んで、森が操縦しているって」
中島「なぜ森先生まで出してるんですかー、スマホまでしか言ってないのに……」
　　一馬、席に着く。美香が伝票とボールペンを取り出す。
松藤「コーヒーを二つ」
一馬「確かに、スマホを使っていると推測しています、多分間違いないと思います」
　　一馬、椅子のひじ掛けをグーで叩く。
一馬「これって大きな捜査協力ですよね？」
松藤「ありがとう、雪家君」
中島「今までもいっぱい協力してます……」
島田「何なんだ、お前ら」
一馬「交換条件です。今現在の捜査結果すべて教えてください」
島田「馬鹿言ってんじゃないよ、お前と俺は、立場が違うんだよ」
美香のM「ん？　歌の文句で聞いたような～」

中島「こんなに協力してるのに、なんで現場の俺たちに情報下りてこないんですかー」
美香のM「ん？　映画のセリフで聞いたような～」
　美香、ハッと我に返りテーブルにコーヒーを置く。
島田「分かった、お前たち。一つだけ教えてあげよう。昨夜、浅川台駅前の大通りでドローンが暴れた。族の数人が大火傷を負っている。以上だ」
中島「島田さん、それもう知ってます。ネットに、もう上がってますよ」
島田「そうなの～」
松藤「じゃ、本当に一つだけだ」
　島田、心配そうに松藤を見る。
松藤「森には、動かせない、大きな動機があるんだ」
島田「松っぁん～」
一馬「動機って、どんな動機ですか？」
松藤「すまんが、そこまでだ！」
　と千円札一枚をカウンターに置き、立ち去る松藤・島田。

○　走る車の車内
　松藤、江口に無線連絡を入れる。
松藤「松藤です。ドローンの操縦方法についてですが、有力な情報を得ました。改造スマホをドローンの中に仕込むことによってどこからでも操縦が出来るということです。我々はもう少し森を洗います」
　飲みかけの缶コーヒーを口にする島田。
松藤「島ちゃん、森の親戚・知人関係をもう一度洗ってみるか……」
島田「そうですね、スマホで遠くから操縦できるってことは何もあの物置にドローンがある必要もないってことですからねー」
松藤「それと、ひょっとしたら探偵団通じて警察の動きを感じ取っていたかもしれん」
島田「そうだとすると、シャワーの後の片手ビールも、演技だった可能性がありますね」
　松藤、捜査資料から森の実家の住所をナビに入力する。ナビを確認しハンドルを切る島田。

○　警視庁捜査一課・江口班
　島田、重い空気の中、ホワイトボードに向かい説明している。
島田「市役所職員に扮して森の実家に入り込みました。築四十年の平屋一戸建てです。母親の八千代が一人暮らしています。すべての部屋を確認しましたが、ドローンを隠しておけるような部屋はありませんでした。念の為、庭の物置も確認しましたが何もありません」

江口「屋根裏とかに隠せるスペースがあるとか？」
島田「いえ、それもありません。十年前のリホームで古民家風というか、梁と屋根裏が見えるように改築していました」
江口「そうか」
島田「次に被疑者の弟宅ですが、独り者でワンルームタイプのアパートなのですが、一階ですので伺う必要もなく部屋の中の写真が撮れました。部屋は狭い上、物で一杯です。ドローンなど置けるスペースは全くありません」
　と写真を指さす。

○　東京数理大学・研究室Ｄ
　研究室の学生数名が集まり、教材用のドローンを囲んで座っている。
一馬「みんなに協力してほしい。ここにあるドローンを改造するために知恵を貸してほしい」
学生Ａ「これって教材用の大きい方だよね？」
一馬「その通り。これを改造するにあたっては森先生から許可は得ている。が、しかし改造を始めていることは、くれぐれも森先生には秘密にしておくように。なぜならサプライズを仕掛けようと思っていますので。皆さんよろしく！」
学生Ｂ「それは了解だけど、どんな改造するの？」
一馬「それにはスペシャルゲストをお呼びしています。どうぞ」
　生田姉弟、目新しいいろいろな機材と共に仕切りカーテンから現れる。学生一同、歓声を上げる。
裕子「皆さん、ごきげんよう。お久しぶりね」
学生Ｃ「ご無沙汰しております、先輩。これらのパーツは？」
裕子「雪家君から頼まれていたものよ。説明は正信、お願い」
正信「これらの秘密兵器、一つづつ説明していくが、全て生田インターナショナルから全世界に手配をかけて入手している優れ物だ。心して聞くように」
一馬「皆さん、拍手――」
　一同、大きめの拍手。中島、一馬を部屋の隅に引っ張りこむ。
中島「どういうこと？　一馬」
一馬「この前話したように、森先生と俺たちは一つにはなれない。森先生の罪がこれ以上大きくならないように、ドローンを阻止したい。その一つの方法として、ドローンにはドローンで対抗する」
中島「マジかよ～」
一馬「マシンガンでもあれば、撃ち落とせるかもしれないけど、そんなの無いし……ちなみにパイロットは、お前だし」

中島「聞いてないよ〜」
一馬「お前ならできるよ、片手でも！」
　正信の説明に戻る二人。正信、筒状のパーツを作業台に置く。
正信「これの名前はネットデールだ。直径10㎝、長さ１ｍのこの筒からは、幅１ｍ、長さ３ｍの網ネットを発射できるようになっている。ちょっとやってみるので前を空けて！」
　　★（図-４参照）
　ネットデールの前が空くと、ボタンを押す正信。ちょうどサランラップのように巻かれていた網が勢いよく３ｍ飛び出す。
正信「今押したのがＡボタンで、網が飛び出るが、まだ片側が筒と繋がっている状態だ」
　正信、筒を持ち上げ、作業台の上に立つ。
正信「つまり、筒に網がぶら下がった状態で飛行し、対象物に接触させ、網に引っかかればそのまま吊り上げることができる」
学生Ｂ「それはつまり、ドローンの手になるということですね」
正信「その通り。そしてこのＢボタン押せば、筒と網が切り離され（網が落ちる）、網だけを対象物に被せ、動きを封じ込めることもできる」
　その気になって熱く語る正信。煙幕弾・照明弾・シークレットミサイルと説明は続く。

○　ある廃工場内（夜）
　鮎川と団員Ａが、壊れた応接セットのソファーに座っている。そこへヤクザの男、進藤（55）が一人現れる。
鮎川「わざわざすみません。進藤さん」
　団員Ａが、まだ壊れていない椅子に進藤を案内する。
進藤「舎弟さん？」
鮎川「まぁ、そんなもんで」
　団員Ａ、ニタっと笑う。進藤、椅子に座ると懐から風呂敷包みを取り出しテーブルに置く。「カタッ」と乾いた音がする。
進藤「金は？」
　鮎川、内ポケットから封筒を取り出し風呂敷包みの横に置く。進藤、封筒の中身を確かめる。
団員Ａ「鮎川さん！」
　鮎川、慌てて風呂敷包みを開ける。更に中の油紙の包みを開ける。露になる拳銃一丁。封筒を確かめ終わった進藤は上着のポケットから弾丸二十発ほどを取り出しテーブルに置く。
進藤「ドローンを撃ち落とすんだったな？」
団員Ａ「ハイ、ボーガンも用意してるんですが……」

進藤「ボーガン？」
団員Ａ「ハイ、あの弓矢みたいな……」
進藤「ああ、西洋弓矢かー、オタクが、カモ打ったりしてるやつか？」
団員Ａ「ハイ、オタクかどうか分かりませんがー、それです」
　鮎川、拳銃を持ち舐め回すように見る。進藤、その鮎川の手の甲を、両手で軽く握り絞める。
進藤「ドローンであろうが、カモであろうが、男が玉を取りに行くときは、これって決まってんだ！　せいぜい大切に扱え」
団員Ａ「ハイッ」
　車に乗り、立ち去る進藤。
団員Ａ「かっけー！　進藤さん！」
　鮎川、銃口を団員Ａに向ける。振り向きざま腰を抜かす団員Ａ。

○　河川敷広場（早朝）
　まだ薄暗い中、改造が完了したドローンを使い実践飛行の訓練をする中島。ノートパソコンに飛行データーをとる一馬。
一馬「休憩しよう」
　中島、ドローンを着陸させる。二人、ベンチに座る。缶コーヒーを渡す一馬。
一馬「スマホと送信機を繋ぐのに苦労したけど、電話機能・カメラ機能・ＧＰＳ機能がそのまま使えるので助かる」
中島「俺の腕も上がったでしょう！」
一馬「江崎名人にあと一歩かなー」
中島「……」
一馬「あとは警察無線の情報から現場住所を入力すれば最短距離で自動飛行してくれる。その後は中島の腕次第だ！」
中島「プレッシャー掛けないでよ。ったく」
一馬「うちのベランダから自動飛行させている間に、俺の部屋に来れるでしょ？」
中島「俺とお前の家、５００ｍしか離れてないから、すぐ来れるけど……」
一馬「何？」
中島「運よく家に居れば、すぐ行けるけど……」
一馬「しばらくは、夕方から自宅待機を！　先生のために……」
中島「それは分かっているけど、俺にだって『パーソナル』はあるわけで……」
一馬「『パーソナル』って。彼女とか、ひょっとしてできた!?　俺という者がありながら……」
　中島、「実は……」と言いつつ駐車場に目をやり少し微笑む。一馬も駐車場を見る。

リムジンから降りる生田裕子。サンドイッチが入っていそうなバスケットを持ってこちらに向かって来る。
一馬「マジですか!?」
中島、顔を赤らめ軽く頷く。
一馬「いつから？」
中島「ドローン作り始めた時から」
一馬「でも、なんでお前と？」
中島「一馬があんな高価なパーツ頼むからだよ」
一馬「えっ、俺がきっかけ!?　確かに高価だったけど、全て生田財閥からの寄付でいいということで……」
中島「お前に言わなかったけど、あの後、パーツ提供の交換条件出されていて……それが『付き合いたい』って告られて……」
ルンルンな感じで近づく裕子。
中島「だけどさー、付き合ってみると、意外と可愛いんだ、彼女！」
一馬「えっ、『彼女』!?」
裕子「ごきげんよう。雪家君」
一馬「おはようございます。先輩」
裕子、バスケットを膝に中島の横に座る。
中島「裕子さん」
裕子「な・あ・に、政弘さん」
一馬のM「政弘さん？　中島の名前忘れてたよ俺」
中島「そのバスケットは何ですか？」
裕子「政弘さんの好きな、お・に・ぎ・り！」
一馬のM「おにぎりかよー」
裕子「雪家君も一緒にどうですか？」
と、バスケットを開けておにぎりを配る。
一馬「ありがとうございます。頂きます」
一馬のM「女は変わるねー！」
×　　×　　×
裕子、食事が終わると、中島の耳元にひそひそ話をした後、駐車場へと歩く。リムジンに乗り込み河川敷広場を後にするが、一緒に来ていたワゴン車は動かない。
×　　×　　×
一馬「リムジンと一緒に来てた、あのごっついワゴン車は帰らないの？」
中島「(ちょっと自慢げに)『あなたの夢中なことに使って』だって」
一馬「えーっ、凄ーい！　中島、あんたは偉い！　ドローンに使っていいってことだよね。

バイク屋のオヤッサンには借りてて悪いけど、ボロすぎるんだよ、あの軽トラ！」
ごっついワゴン車の隣にドローンを載せて来た軽トラが駐車している。

○　消防局・集中指令室（夕）

ホールほどの大きい部屋に三十名ほどの職員が消防・救急の対応に追われている。壁一面に管轄地域の情報を一望できる大型モニターが設置されている。

職員Ａ「西山区七丁目、山神通り、ラブイングマンションの南棟、15 階建ての 8 階から出火している模様！」

職員Ｃ「モニターに出します！」

一同、モニターを見る。モニターには、街頭カメラからの画質の悪い映像と地図が表示されている。現場地点が地図上で点滅している。

職員Ｄ「今のは爆発では？」

カメラの映像に、黒い煙が映し出される。室長、馬場政行（50）がマイクを取る。

馬場「緊急要請通話に切り替える」

職員Ｂ「切り替えました」

馬場「応援要請。西山区七丁目、山神通り、ラブイングマンションの南棟、15 階建ての 8 階から出火・延焼・爆発の可能性あり。関係各所へ応援要請を発動する！　応援要請を発動する！」

○　西山区三丁目、駅前通り

同時刻。鮎川率いる暴走族。先頭の四輪車一台とバイク十台が暴走行為を繰り返している。

○　警視庁捜査一課・江口班

事件の発生を知らせるアナウンス「消防局より応援要請。西山区七丁目、山神通り、ラブイングマンションの南棟、15 階建ての 8 階から出火している模様！　続いて、所轄より連絡。西山区三丁目、駅前通りに暴走族車両 10 台ほどが北へゆっくり移動中！」

江口「二件とも近いなー」

無線のマイクをとる江口。

江口「聞いてたか、二人共？」

松藤、一人で森のマンションを監視中。島田、車運転中。

松藤の声「こちら松藤、了解です。引き続き、森を監視します」

島田の声「代理、現在、鳩山区を走行中です。族を追います」

江口「待て、島田！　族の方は所轄が当たっている。お前は火災現場に向かい現場整理に

協力してくれ！」
島田の声「ドローンが現れたらどうするんですか？　代理！」
江口「分かっているが、人命第一！　火災現場の方が緊急性が高い。命令だ！」
島田「了解です」
×　　×　　×
ドローン事件で合流していた立花班より江口に無線が入る。ヘッドホンに片手を当てその内容に聞き入る江口。
江口「了解した。いつもすまん。無理せず急行してくれ！」
眉間に皺を寄せる江口、すかさずマイクを握る。
江口「二人共、聞こえるか？」
松藤・島田の声「ハイ」
江口「先ほど立花班より連絡が入った。被疑者森の弟、森義弘が自宅とは別の高層マンションの一室を借りていることが判明、現在立花班が急行している。そこにドローンがあればそこから発進するかもしれん。松さん、引き続き森を集中監視！」
松藤の声「了解」
江口「それと島田は火災現場手前で待機。今回、族と火災現場が近いので族が火災現場に入らないように対応してくれ！」
島田の声「了解です」

○　雪家邸・一馬自室
警察無線と消防無線を聞きながらドローンの発進準備に入る一馬・中島。
中島「まだドローンは現れてないね」
一馬「火災現場と近くだから、関係ある？」
中島、テレビの電源を入れる。火災現場をニュースで実況している。

○　高層マンションの一室
森義弘が契約している高層マンションの一室に踏み込む立花班。部屋に入れまいと抵抗する義弘の奥にドローンが飛び立とうとしている。
立花「早くドローンを落とせ！」
激しく抵抗する義弘に狭い廊下を進めない捜査員たち。後方に居た捜査員がドローンに向け銃を構える。それに気づいた立花は、とっさに銃口を天井に向ける。と同時に発砲、照明に当たり、一帯が暗くなる。
立花「流れ弾が下の通行人に当ったらどうする！」
と怒鳴る中、すでに目の高さにホバリングしていたドローンが飛び立つ。一歩遅れてベランダの手摺につかまる捜査員たち。ドローンを見送る。

○　**警視庁捜査一課・江口班**

再度、立花班より江口に無線が入る。

江口「了解。ご苦労様！」

眉間に皺を寄せる江口、溜息の後マイクを握る。

江口「二人共、聞こえるか？」

松藤・島田の声「ハイ」

江口「立花班より連絡あり。高層マンションにて義弘確保、しかしながらそこに居たドローンは確保できず。南に向かって飛行中とのこと。方向からして現場に現れる可能性大！　松さん、そっちはどうだ？」

松藤の声「それが……。森はリビングでテレビを見ています……!?」

江口、マイクを握りしめ、ゆっくりと、目を閉じる。そこへアナウンスが入る。「西山区三丁目、駅前通りにドローン発生！　暴走族車両の上空へ移動中！」

○　**雪家邸・一馬自室**

一馬、ノートパソコンのリターンキーを押す。ドローンが発進し、自動飛行にて現場へと向かう。

○　**西山区三丁目、駅前通り**

ビルの陰からゆっくりと現れるドローン（ドローンの視線へと変化してゆく）

○　**森の部屋・操縦室らしき部屋**

机の前と横に大きなモニターが計３台設置されている。ドローンからの映像が、暴走族と、その横を走り抜ける数台の消防車を捉えている。机の上には送信機の他に幾つもの電子機器が並び、その横に一枚だけ古びた家族写真が見える。

○　**西山区三丁目、駅前通り**

暴走族の真上へとゆっくりと移動するドローン。族の団員はまだ気づかない。いつもより上空でホバリングしながら何かを落下。道路に到達し爆発する。三台のバイクが倒れ、一台が引火し燃え上がる。

団員Ａ「下りてこい、この野郎！」

バイクを降りサイドバックからボーガンを取り出し上空に構える団員Ａは、車列後方に位置している。

×　　×　　×

車列先頭で停まっている四輪車からは、酒に酔った団員Ｂが降りて来てドローンに向

かって叫んでいる。他のバイクはエンジンの殻ふかしを激化させ一帯が煙で充満する。

団員Ａ「ド、ローーーン！」

と、ボーガンの引き金を引く。勢いよく放たれた矢はドローンまで届くも横をすり抜ける。

×　　×　　×

団員Ｂ「ウッーーー！」

一帯の煙が夜風に流されると、ボーガンの矢が胸に刺さった団員Ｂが立っている。ふら着きながら車のドアまで戻ると、それを見た車内の女性から悲鳴が上がる。直後、団員Ａが放っていた矢が次々と車の屋根、ボンネットに突き刺さり、更に悲鳴が上がる。

鮎川「ふざけやがって――」

銃を上空に向け発砲する鮎川。５発撃つが当たらない。パトカーから警官が降り鮎川を追う。ドローンに発砲しながら走って逃げる鮎川。

○　雪家邸・一馬自室

自動飛行にて現場に到着した中島ドローンからの映像を６台の大型モニター（生田インターナショナルのシールが貼られている）で見入る二人。モニターの前に座り送信機に手を置き緊張気味の中島。その後ろで見守る一馬。

一馬「あっ、いた！」

と森ドローンを見つけ指さす。

中島「了解、同じ高さまで下りてみる……」

一馬「いや、ちょっと待って。まだこっちの存在に気づいてないから不意を突こう」

中島「いきなり攻撃するの？」

一馬「向こうはベテラン、こっちは初心者。対等に戦ったらやられる。少しでも出鼻をくじいた方がいい」

中島「話して説得するんじゃなかったの？」

一馬「勿論、説得するが、その前に、こっちにも攻撃できる能力があることを示した方がいいと思う」

中島「分かった……」

森ドローンの真上に移動する中島ドローン。一馬、机の上のコントロールパネルのボタンを指さす。目で確認する中島。

中島「シークレット弾、発射！」

命中せず、森ドローンの２ｍほど横で爆発する。森ドローンは、５ｍほど飛ばされるが、自動で姿勢を立て直す。

○　森の部屋・操縦室らしき部屋

モニターの映像が乱れる。周りの計器をチェックする森。映像は戻るが、中島ドローンが映り、驚く森。

○　あるマンションの一室

森の部屋を監視する松藤に無線が入る。

江口の声「松さん、そっちはどうだ？」

松藤「それが、依然として動きません！」

森はリビングでテレビを見ている。（ソファーに座る森の後ろ姿が映る）

江口の声「分かった、松さん。そっちに応援をやるから、いつでも踏み込める準備だけしといてくれ」

松藤「了解です」

○　西山区三丁目、駅前通り

走っている島田の携帯に着信。走りながら携帯をとる島田。

島田「ハイ、島田」

江口の声「今どこだ？」

島田「今、走って、族のところまで来ています。火災現場は消防と一般車両で一杯です。車で入ろうにも入れません」

と息を切らし答えるも、上空を見て驚く。

島田「ドローンが二台！」

江口の声「何？」

島田「ドローンが二台飛んでます」

江口の声「ドローンが二機飛んでるのか？」

島田「はい……」

○　消防局・集中指令室

元々車両が入りづらい立地にあるラブイングマンション。帰宅時間の交通渋滞も重なり応援の消防車両が入れず消火活動が遅れている。

職員Ａ「室長、11 階に救助を求める母子が確認できます！」

一同、モニターを見る。

馬場「はしご車はどこだ？」

モニターの地図で位置が点滅する。

職員Ｄ「この状況ではマンション北側に付けるのがやっとです！」

馬場「（小さな声で職員Ｂに）スーパーハシゴは？」

職員Ｂ「出動要請すでにかけてますが、いつ到着できるか……」
職員Ｃ「北側からだと、今のはしご車では、11 階まで梯子が届きません！」
馬場「すでにスーパーハシゴの要請はかけている！」
職員Ｂ「レスキューヘリより連絡。11 階の人影を確認できるが、隣が高層ビルのため接近不可能とのことです」
馬場「スーパーハシゴがスムーズに到着できるように、警察に交通規制を要請しろ！」
職員Ｂ「了解！」
馬場のＭ「間に合ってくれ……」

○　西山区三丁目、駅前通り・上空

上空で対峙する二機のドローン。中島ドローンのスピーカーから声が出る。
一馬の声「先生、止めてください！　これ以上、罪を重ねないでください」
×　　×　　×
モニター横のマイクに向かって話す一馬。
×　　×　　×
森ドローンから声が出る（ボイスチェンジャーのかかった声）。
森の声「イヤダ！」
いきなり攻撃を仕掛ける森ドローン。ドローン対戦がはじまる。上空を見上げる族、警官、野次馬。マスコミも駆けつけ各局実況中継を始めている。

○　雪家邸・一馬自室

モニター横のテレビでドローン対戦を放送している。
男性リポーター「……一機目のドローンがまず暴走族を蹴散らした後、二機目のドローンが現れ、そして今まさに上空でそのドローン二機が対戦をしているように見えます。なぜ二機現れているのかは不明です」
テレビ局のカメラが、リポーターから上空に向けられる。
男性リポーターの声「また、ここから通り三つ北側のビルでは火災が発生しています。ここの現場との関係性は無さそうです」
テレビ局のカメラが、上空から火災現場の方向に向けられる（多くの渋滞車両とマンションの煙が映し出される）。
×　　×　　×
画面切り替わって火災現場。
女性リポーター「こちらは西山区七丁目、山神通り、ラブイングマンションの前です。大きく炎が上がっています。そして見てください。11 階あたりに手を振って助けを求めています」

テレビ局のカメラが、リポーターから 11 階に向けられる（ズームアップされ母子が映し出される）。

女性リポーターの声「見てください！　お母さんと子供でしょうか、いや、赤ちゃんです。まだ生後間もないちっちゃな赤ちゃんです、早く救助してあげてください。近くに、はしご車は見えません（最後は涙声）」

島田に電話する一馬。

一馬「島田さん、現場に居るんでしょ？」

島田の声「ひょっとしてお前たちのドローンか？」

一馬「後で説明します。このまま電話を切らずに聞いていてください」

○　西山区三丁目、駅前通り・上空

攻撃手段を使い果たし、向き合ったままのドローン。

一馬の声「聞いてください。今ニュースで近くのビルで火災が発生して母親と小さな赤ちゃんが救助を待っています。11 階です。助けに向かいたいです」

森の声「ムリダロ！」

中島の声「先生のドローンは、正義のドローンです。お願いします」

×　　×　　×

マイクに向かって話す一馬・中島。

×　　×　　×

森の声「ワカッタ、ドウスル？」

一馬の声「考えがあります。ついて来てください」

下降する中島ドローン、追従する森ドローン。近くのコンビニの駐車場に着陸する二機。周りの人がドーナツ状に見守る。

一馬の声「この黒い筒からネットが出ます、そのネットの先端が先生の脚の先端に引っかかると思います。発射します」

中島ドローンのネットデールから網ネットが発射される。しかし、ドローン着陸用の二本ある脚の先端の曲がりに、片方しか網ネットが引っ掛からない。

焦る一馬・中島。

一馬「(大きな声で）島田さん、片方の網を引っ掛けてください。俺たち火災現場に向かいます。早く！」

島田「分かった」

恐る恐る森ドローンの下に手を伸ばし網を引っ掛ける島田。

一馬の声「ありがとう、島田さん。発進です、先生！」

網を張った状態で、ゆっくりと上昇する二機。車に急いで戻る島田。

★（図- 5 参照）

○　**警視庁捜査一課・江口班**

　　テレビの中継に見入る江口に、島田より無線が入る。

島田の声「島田です。ドローン二台はタンデムで火災現場に向かっています」

江口「もしかして、赤ちゃん救出するのか？」

島田の声「現場に赤ちゃんがいるなら、そうかもしれません」

江口「島田！」

島田の声「ハイ」

江口「さっき松さんに、森宅突入の指示をした」

○　**森の部屋・居間**

　　森宅に突入する松藤と捜査員たち。居間のソファーにはカツラを被せたダミーの人形がテレビを見ている。その人形を揺らすための紐が、隣の部屋に続いている。辿る松藤ら。ドアを開くと森が操縦している。

松藤「そこまでだ！　森」

　　捜査員が森を取り押さえる。

森「ちょっと待って！　赤ちゃんがどうなってもいいのか？」

　　松藤の携帯が鳴る。

島田の声「松っぁん！　森確保、待ってください。ドローンは火災現場に、赤ちゃん救助に向かってます」

○　**火災現場**

　　マンション上空でバランスを崩す森ドローン。森ドローンのプロペラの回転が半減し、一瞬、中島ドローンに網を介してぶら下がる形になる。

　　×　　×　　×

　　「先生！」と叫ぶ一馬。

　　すかさずアクセルレバーを上げる中島。

　　×　　×　　×

　　森に操縦を許し、見守る松藤ら。

　　×　　×　　×

　　バランスを取り戻す二機のドローン。

○　**消防局・集中指令室**

　　馬場が現場の消防隊長と無線連絡している。

消防隊長の声「落下シートを張って母親の真下の位置で待機したいと思います」

馬場「待て！　真下に行くのは待て！　母親が早まって赤ちゃんを投げるかもしれん！」

×　　×　　×

地上では赤ちゃん落下を想定して円形の落下シートを消防八人で引っ張っている。

×　　×　　×

消防隊長の声「しかし、はしご車はどうせ届きません」

馬場「だが、赤ちゃんと言え、11 階から正確にキャッチするのは無理だ！　スーパーハシゴが到着するのを待て！」

消防隊長の声「……」

職員Ｂ「警視庁より連絡。二機のドローンが赤ちゃん救出に向かっているとのことです」

職員Ａ「あ、これです」

と、モニターを指さす。注目する一同。

馬場「なんだとー」

馬場、じっくりドローンの特徴を見る。

馬場「隊長、聞いたか！　飛び入り参加のドローンさんだ。そっちからも見えると思うが、赤ちゃんキャッチの手伝いは出来そうだ！」

消防隊長の声「馬場さんに従いますので、指示を！」

馬場「ドローンがベランダの横に付けたら母親が赤ちゃんをネットに乗せると思うので、乗ったのを確認したら、その真下に落下シートを追従させてほしい」

消防隊長の声「了解！　半分でも下がってくれれば、落下してもキャッチ出来ます」

○　火災現場

マスコミの報道が過熱している。

女性リポーター「こちらは西山区七丁目、山神通り、ラブイングマンションの前です。依然として大きく炎が上がっています。そして見てください。先ほど、網を張ったドローンが二機、母親がいるベランダに接近しています」

テレビ局のカメラが、リポーターから 11 階に向けられる（ズームアップされる）。

女性リポーターの声「あっ、そして今、そのネットに母親が赤ちゃんを、今入れました」

歓声が起こる現場、消防局、警察、テレビを見入る一般家庭。

×　　×　　×

赤ちゃんの重みで一旦、2 mほど下がるドローン。その後ゆっくりと降下を始めるが、森ドローンのプロペラが電線と接触する。

女性リポーターの声「ああ、バランスを崩しました！」

モーターの一つから出火する森ドローン。安定を崩すタンデム。

×　　×　　×

一馬「俺たちの下には、シートが待機している。あと少し下がったらＢボタンを押す」

中島、頷く。

一馬、Ｂボタンに手をかける。

モニターとテレビの画像を見合わせながら一馬、Ｂボタンを押す。

×　　×　　×

女性リポーターの声「ああ、ああ――、……赤ちゃんはキャッチしています。消防員のシートがキャッチしています」

再度、歓声・万歳が起こる現場、消防局、警察、テレビを見入る一般家庭。

×　　×　　×

スーパーハシゴが到着、母親も無事救出される。

×　　×　　×

傷だらけで出力を失った二機のドローン。ゆっくりと各々着陸する。近くまで駆け寄っていたずぶ濡れの島田が、スライディングして、森ドローンの脚を両手で抑え込む。

島田「ドローン、確保――！」

×　　×　　×

松藤が見守る中、操縦を終えた森の手に手錠がかけられる。

最後に一つだけキーを押す森。

×　　×　　×

島田が確保したままのドローンからカードが一枚吐き出される。片面に『騒ぐほど　等し命と　知るはずの　夢も過ぎれば　これを覚えむ』とあり、風が吹き、もう片面が見える。

『ＴＡＢ　ＣＯＰ　俺真警』

サイレンが響き渡る。

○　雪家邸・居間

Ｔ「半年後」

テレビからニュースが流れている。

ニュースキャスター「警視庁は、ドローンを活用した軽犯罪ドローン対策課の設置を発表しました。これに関連しまして、消防庁も、ドローン救助班の設置検討を発表しました……」

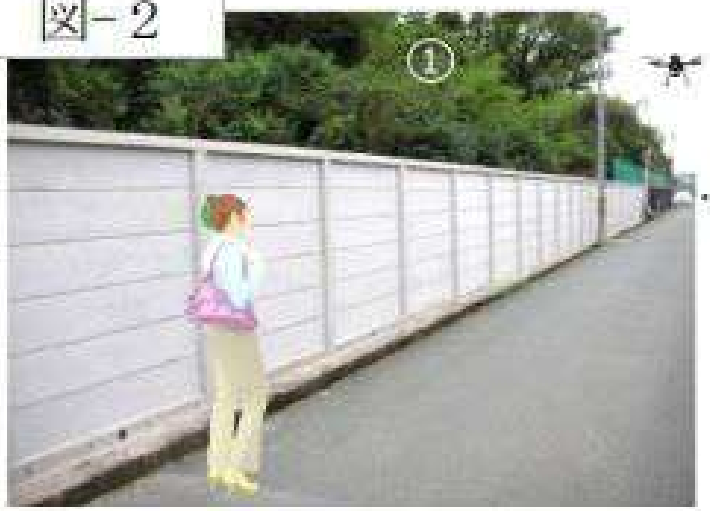
（終わり）

図－1

※イメージです。

森ドローン

図－2



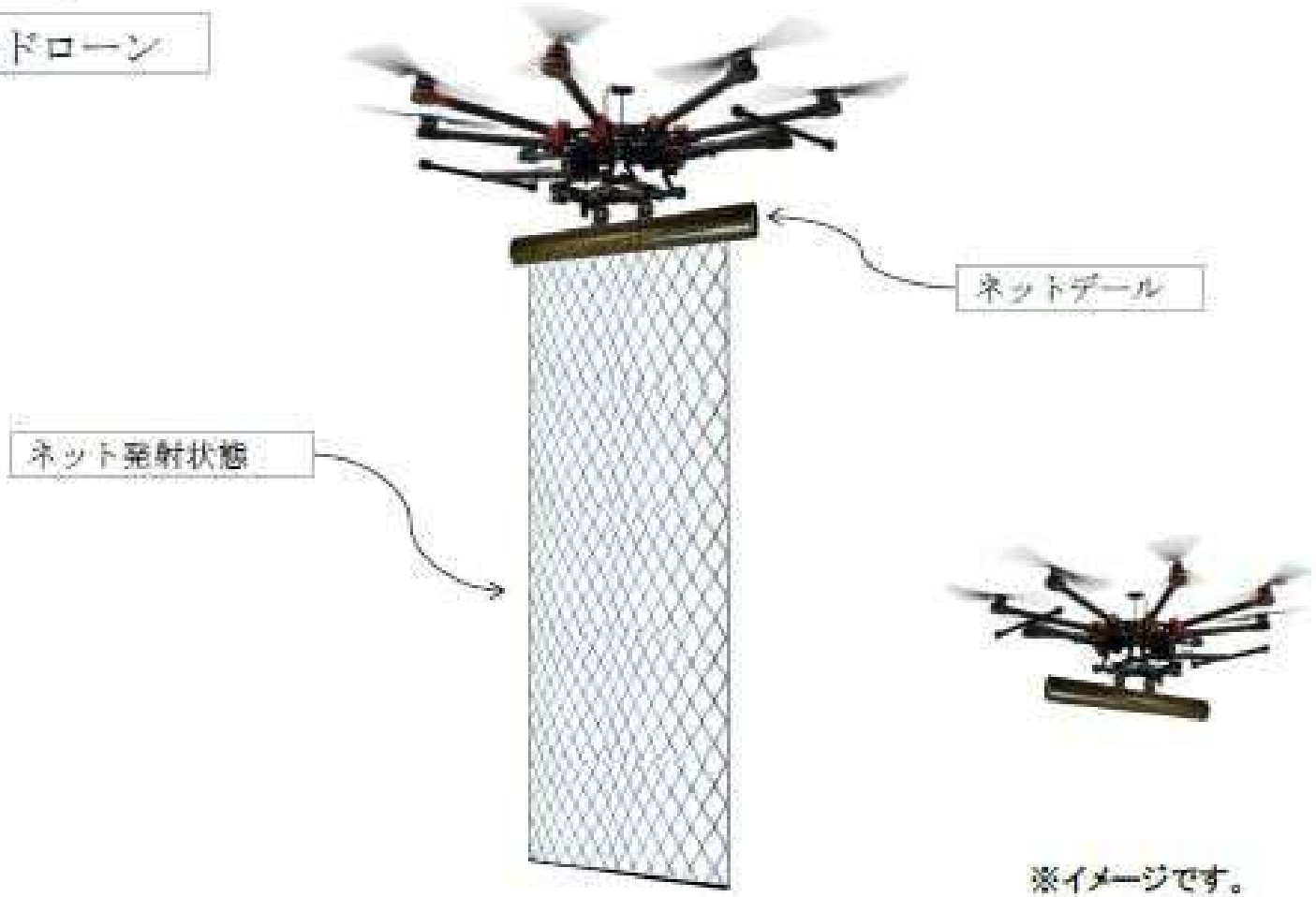
※イメージです。

図－3

※イメージです。

図－4

中島ドローン



※イメージです。

図－5

タンデムドローン

※イメージです。